鏡千人塚遺跡・鏡西谷遺跡出土の中近世煮炊具について

石丸恵利子・大近美穂

１．はじめに

広島大学の東広島キャンパス（東広島地区）は国内最大級の敷地面積を誇り、敷地内には旧石器時代から近世にわたる多くの遺跡が確認されている。中でも生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センターの農場が広がる地域一帯は、中世山城である鏡山城跡の南麓にあたり、鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡などの中世の遺構・遺物を含む遺跡が確認されている（第１図）。現在は市道によって分断されているが、鏡山は南西方向にも尾根が延び、ががら山と呼ばれる山塊に続いている。1981・1982 年に実施された前述の遺跡の調査において、ががら山寄りの鏡西谷遺跡で郭状の平坦面や柵列と思われる柱穴群が検出されていることから、ががら山側にも鏡山城に関連する機能があった可能性が指摘されている（藤野・増田 2003）。2009 から 2012 年に実施された国指定史跡鏡山城跡の範囲確認のための発掘調査においても、関連する遺構の広がりや同時代の遺物が確認されている（藤野ほか 2013）。

以上のことから、鏡山とががら山南麓およびその周辺に位置する中世遺跡から出土する資料は、鏡山城が築城された前後の人々の暮らしや文化を知るうえで貴重な情報を与えてくれるものであり、これまでに陶磁器、瓦器、須恵器、土師質土器坏・皿類の集成が行われている（永田ほか 2011、永田・藤野 2009・2012・2014・2015）。

本稿では、東広島キャンパスに所在する遺跡のうち、鏡千人塚遺跡と鏡西谷遺跡出土の中近世煮炊具（鍋・釜類）について、報告済資料に加え未整理であった資料の中から抽出した約 160 点を図化して報告を行い、両遺跡の煮炊具の特徴や形態や製作技法の変遷について考察する。対象とした資料には、中世と近世を明確に区別することができなかったものも含まれているため、中近世資料と題して報告することとする。

２．安芸地方中世煮炊具の研究略史

安芸・備後地方の中世土器類の研究は、1960 年代から約 30 年にわたって発掘調査が実施された草戸千軒町遺跡の出土資料を中心として、備後南部地域における土師質土器編年研究が進展している（鈴木 1996）。煮炊具についても、鎌倉時代後半から室町時代後半の土師質土器鍋を２タイプ（Ｂ・Ｃ）に、瓦質土器鍋を５タイプ（Ｂから

第１図　広島大学東広島キャンパスおよび周辺の中世遺跡分布図

（●は本稿で報告した遺跡、○はその他の中世遺跡である。国土地理院１：50,000 地形図「海田」（1984 年発行）、「竹原」（1985 年発行）の一部を利用した。）

1. 鏡千人塚遺跡　2. 鏡西谷遺跡　3. 鏡東谷遺跡　4. 鏡山城跡　5. 山中池南遺跡第１・２地点　6. 清水奥山遺跡　7. 陣ヶ平山城跡　8. 二神山城跡　9. 西中郷遺跡　10. 黄幡１号遺跡　11. 大槙１号遺跡　12. 八幡山城跡　13. 狐ヶ城遺跡　14. 道照遺跡　15. 寺家城跡　16. 山崎１号遺跡　17. 山崎２号遺跡　18. 諏訪面遺跡　19. 大地面遺跡　20. 安芸国分寺跡　21. 安芸国分尼寺伝承地遺跡　22. 石佛遺跡　23. 鷺田遺跡　24. 向城跡　25. 古慈喜城跡　26. 浄福寺３号遺跡　27. 溝口４号遺跡　28. 荒谷土居屋敷跡　29. 上泓遺跡　30. 下上戸遺跡　31. 五反田遺跡　32. 城平山城跡　33. 第１若山城跡　34. 第２若山城跡　35. 福成寺旧境内遺跡

Ｆ）に、また釜は２タイプ（Ａ・Ｂ）に分類されている。なお、安芸と備後での中世土器の様相がかなり異なっている点については、比較された資料が少ないものの、早い段階で指摘されている（鈴木 1985）。

安芸地方においては、1980 年代になると広島市や東広島市、安芸高田市など各地で中世遺跡の調査が増加し、土師質土器を含む中世土器研究発展のための資料は確実に蓄積されてきた。しかし、安芸地方の研究は備後地域と比較して立ち遅れているといえる。各遺跡出土の土師質土器資料の年代観をつかむために、これまでも共伴関係や形態分類から検討が行われているが、安芸地方全体を対象に土師質土器編年を概観したものは、吉野健志氏の研究に始まる（吉野 1998）。搬入された土器・陶磁器の年代観を参考に、安芸国南部における坏の編年が試みられ、安芸地方の土師質土器編年の基礎を築いた。その後、広島大学東広島キャンパス内出土の坏・皿資料約 400 点が集成され、形態や製作技術などの形態分類によって特徴が示された（永田・藤野 2014）。また、それらの形態分類をもとに、西条盆地全体およびその他の安芸地方の出土資料における土師質土器の坏・皿の組成と変遷が論じられている（永田・藤野 2015）。

近隣地域において、本稿で取り扱う煮炊具を取り上げた研究としては、山口県（周防・長門）の中世を特徴づける瓦質土器鍋（防長型足鍋）の研究の中で、安芸および備後地方の煮炊具の消長が述べられている（岩崎 2007）。草戸千軒町遺跡の出土資料に基づく編年に、安芸地方を中心に備後南部や石見西部にも分布する鍋として、口縁部外側に突帯を巡らせる鍋（羽釜型鍋）の変遷を併記して年代観が示されている。安芸地方では土師質・瓦質の両者が認められることから、「鍋Ｆ」と分類している。これは草戸千軒町遺跡による備後地方の分類において「瓦質土器鍋Ｆ」としている形態と一致するもので、この形態が安芸地方に多いことから、これらの地域からの搬入品ではないかと指摘されている（鈴木 1996）。

安芸地方における煮炊具の研究としては、吉野が一国規模で流通する製品の代表的なものとして土師質土器鍋を挙げ、形態の異なる煮炊具の出土分布に注目している（吉野 2012）。安芸地方で出土する煮炊具には、口縁端部がくの字の受け口状に広がるもの（Ｎ類）と口縁直下に鍔を巡らせる羽釜タイプが存在し、後者は、煤の付着などからそのほとんどが囲炉裏や焚火などで鍋として使用されたと考えられる羽釜型鍋だとする。岩崎編年の鍋Ｆがこれに相当する。吉野は、羽釜型鍋を製作技法の違いからＡ類（安芸型）とＢ類（西条型）の２型に分類し、Ｂ類が西条盆地に濃密な分布を示すことから、西条盆地が生産地であり、基本的な商業圏は賀茂郡内であったと考えられ

ることを指摘している。N類は鈴木による草戸資料の分類の土師質土器鍋B・Cに相当し、吉野が示すA・B類は瓦質土器Fと同一の形態に分類されるものである。

以上のような先行研究を踏まえて、西条盆地や安芸地方全体における中近世煮炊具の様相や生産および流通についてより考察を深めるために、本稿では東広島キャンパスの鏡地区（鏡千人塚遺跡・鏡西谷遺跡）から出土する煮炊具の形態や製作技術の特徴を明らかにしたい。

３．遺跡の概要

鏡千人塚遺跡

遺跡は、鏡山城跡南東麓の丘陵上に位置し、古くから千人塚などとして積石の存在が知られていた。広島大学移転における農場予定地の土取りの中心的な部分であったことや、鏡山城と関連する出城や居館跡などの存在が予想されたため、1979・1980年に広島県教育委員会と広島県埋蔵文化財センターが、また1981年には広島大学埋蔵文化財調査室（現、埋蔵文化財調査部門）によって発掘調査が行われた。調査後は、造成によって農場の農地となり失われた（第１図１）。

調査によって、室町時代の土壙墓群や掘立柱建物跡、弥生時代の溝状遺構など多くの遺構が検出され、土師質土器（坏・皿・鍋など）、中国陶磁器（白磁・青磁）、鉄製品（釘・短刀など）、弥生土器、石器など、弥生時代・古墳時代・中世の遺物が出土している（植田ほか1982、藤野・増田2003）。立地の点においては、鏡山城の南側直下である点や丘陵が平坦で郭状を呈することから、鏡山城関連の建物があった可能性がある。13世紀代から遺構の形成が始まり、15世紀後半の墳墓を主体とするが、建物跡も確認されたことから、居住地あるいは鏡山城を取り巻く外郭としての利用が指摘されている。また、土壙墓の副葬品である複数の土師質土器坏・皿の一括資料は、西条盆地における14世紀前半の基準資料となっている（永田・藤野2015）。

鏡西谷遺跡

遺跡は鏡千人塚遺跡の西方約400ｍ、鏡山とががら山をつなぐ尾根の南側谷部に位置する（第１図２）。1980年からの予備調査で発見され、1981・1982年に広島大学埋蔵文化財調査室によって発掘調査が行われている。AからH地区分けて調査が行われ、弥生時代の竪穴住居跡や土坑、溝など、鎌倉から室町時代（中世）の掘立柱建物跡や溝、郭状遺構など、また近世の土壙墓などの遺構が検出されている（藤野・増田2003）。

縄文時代から近世に至る資料が確認されており、弥生時代中期後葉から後期前葉と鎌倉時代前期から室町時代中期を主体とする複合遺跡である。市道の付け替えによって消失したＡからＣ地区と農地となったＨ地区以外は、埋め戻して保存区となっている。

中世の遺構はＢ・Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｈ地区で検出され、遺物は全域で出土している。中でも中世前期のものが多くを占め、Ｃ・Ｆ地区で掘立柱建物が、またＤ地区は墓地としての利用が認められ、鎌倉時代前期（13 世紀初頭から前半）に位置付けられる。Ｂ地区では、平坦面や溝、柱穴群などが検出され、鎌倉時代後期から南北朝時代さらには室町時代前期頃まで利用されている。また、遺跡の西端にあたる丘陵上のＦ地区やＨ地区では、鏡山が本格的に城砦化する 15 世紀後半から 16 世紀前葉（中世後期）にがから山東麓の防御機能をもったものと考えられる郭や柵状遺構が検出されている。

なお、鏡山城は 15 世紀後半に文献に記載が認められ、1523 年に落城したとされる。また、鏡千人塚遺跡と鏡西谷遺跡の間に位置する鏡東谷遺跡の南地区では、15 世紀後半から 16 世紀前半に位置づけられる居館が検出されており、これらの遺跡が 15 世紀後半を中心とした時期に同時に存在した可能性が指摘されている（藤野・増田 2003）。よって、この時期（室町時代中期）の遺構や出土遺物は、鏡山城が利用されていた時期の様相を知るうえで注目される資料だといえる。

４．出土資料の特徴

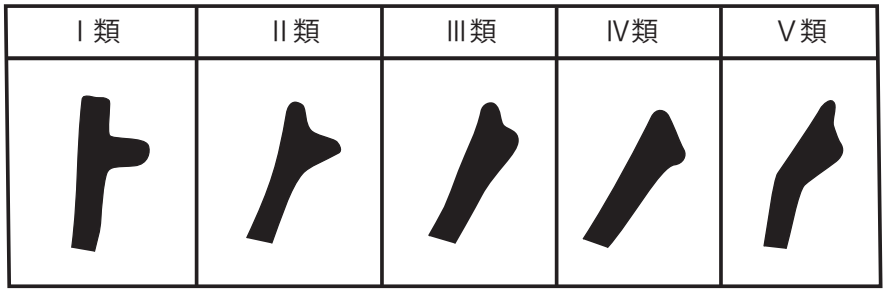
鏡地区の煮炊具の特徴について、以下に遺跡ごとに記すが、口縁の形態分類および呼称は鈴木（1996）に準じ、口縁直下に鍔を巡らせる羽釜タイプは（土師質土器）鍋Ｆに分類した。吉野分類のＡ類（安芸型：Ｆ－Ａ）とＢ類（西条型：Ｆ－Ｂ）はここに含まれるものとする（第１表）。口縁端部がくの字の受け口状に広がるものは鍋Ｂおよび鍋Ｃに分類されており、吉野分類のＮ類がこれらに相当する。

本稿ではさらに鍋Ｆ（安芸型：Ｆ－Ａと西条型：Ｆ－Ｂを含む）の口縁部の形状をＩからＶの５つに分類した（第２図）。Ｉ類は口縁端部上面を平面的に仕上げたもので、断面がコの字あるいは三角形状の鍔を巡らせたものをＩ類とした。上面がややくぼんだものや口縁部がやや肥厚したものもここに含めた。Ⅱ類は口縁端部を丸く収め、直下に断面がコの字あるいは三角形状の鍔を巡らせたもの、Ⅲ類は鍔の突起やくびれが明瞭でなく、鍔部分はほぼ断面が三角形状でなだらかに成形したものとした。また、Ⅳ類は口縁端部から鍔の先端が直線的なもの、Ｖ類は口縁端部に鍔を巡らせ口縁下方

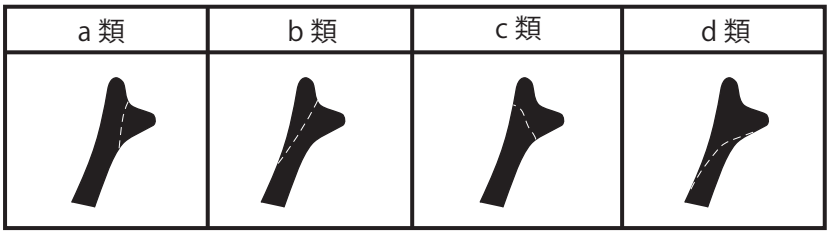
第１表　煮炊具の形態分類と基準

分類		分類基準	備考
土師質土器	鍋Ｂ	外反した口縁部が直線的に延びるもの	吉野（2012）のＮ類
	鍋Ｃ	口縁部が受け口状に内湾するもの	
	鍋Ｄ	口縁部の内側に耳（内耳）をもつもの	
	鍋Ｅ	口縁部外面に把手を付けたもの	
	鍋Ｆ	口縁外側に突帯が巡るもの	吉野（2012）のＡ・Ｂ類
	鍋Ｇ	口縁外側に突帯がないもの（煤付着あり）	鈴木（1996）に追加した分類
	釜Ａ	口縁部を内湾させたもの	
	釜Ｂ	口縁部を絞り直立させたもの	

＊鈴木（1996）に準じ一部加筆



第２図　鍋Ｆ口縁形態の小分類



第３図　鍔貼り付け方法の分類

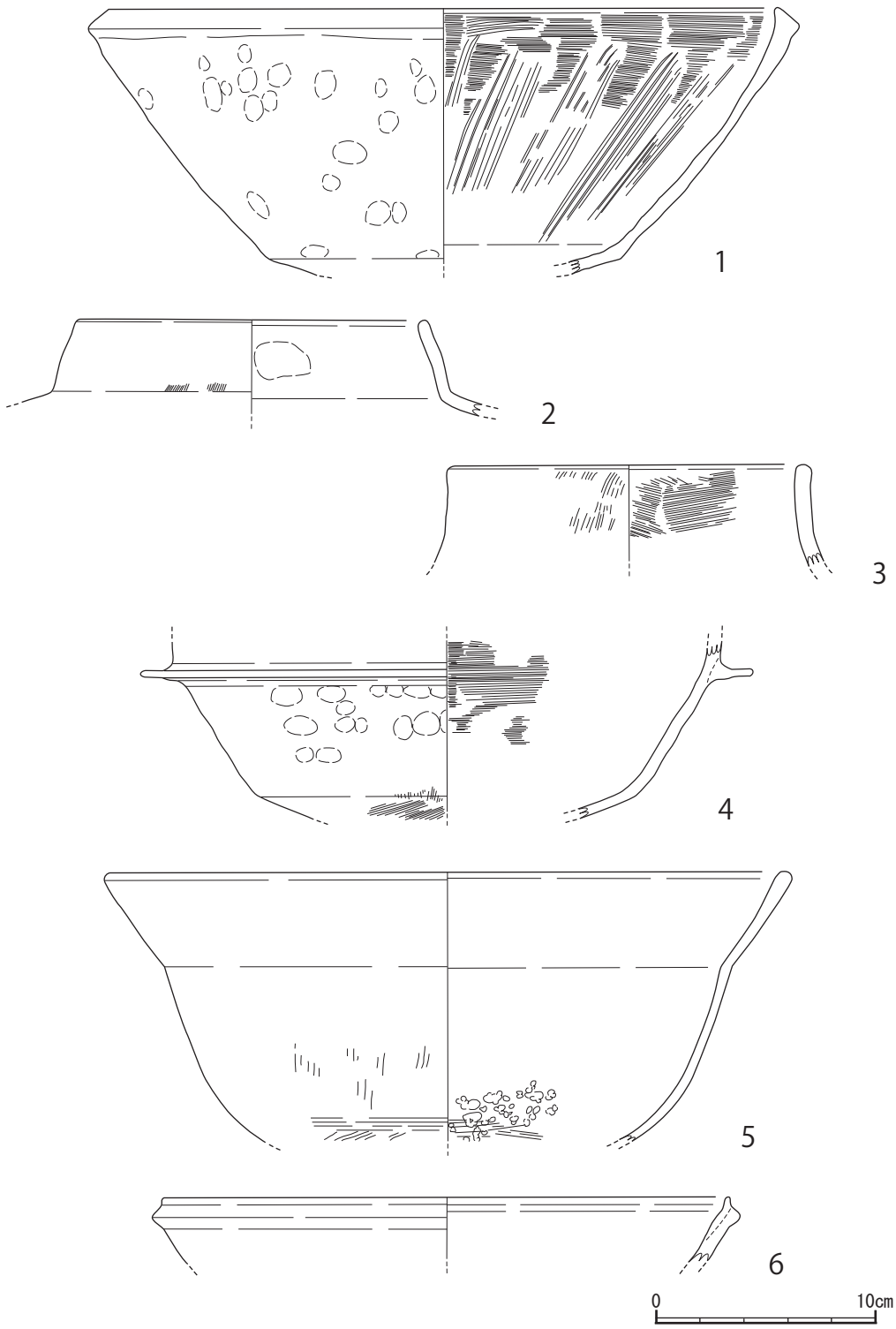
がくの字状にくびれるものとした。なお、鍔は巡らないが外面に煤が付着しているものがあり、鍋としての機能があったと考えられるものについては鍋Gに分類した。体部の傾きについても、１類：体部が上部に立ち上がるもの、２類：体部が外方に開くもの、３類：体部が内湾するものに大別した。さらに、鍔の貼り付けが観察できるものについては、その技法をａからｄの４類に分類した（第３図）。以下、これらの表記に従って各資料の特徴を述べる。

鏡千人塚遺跡

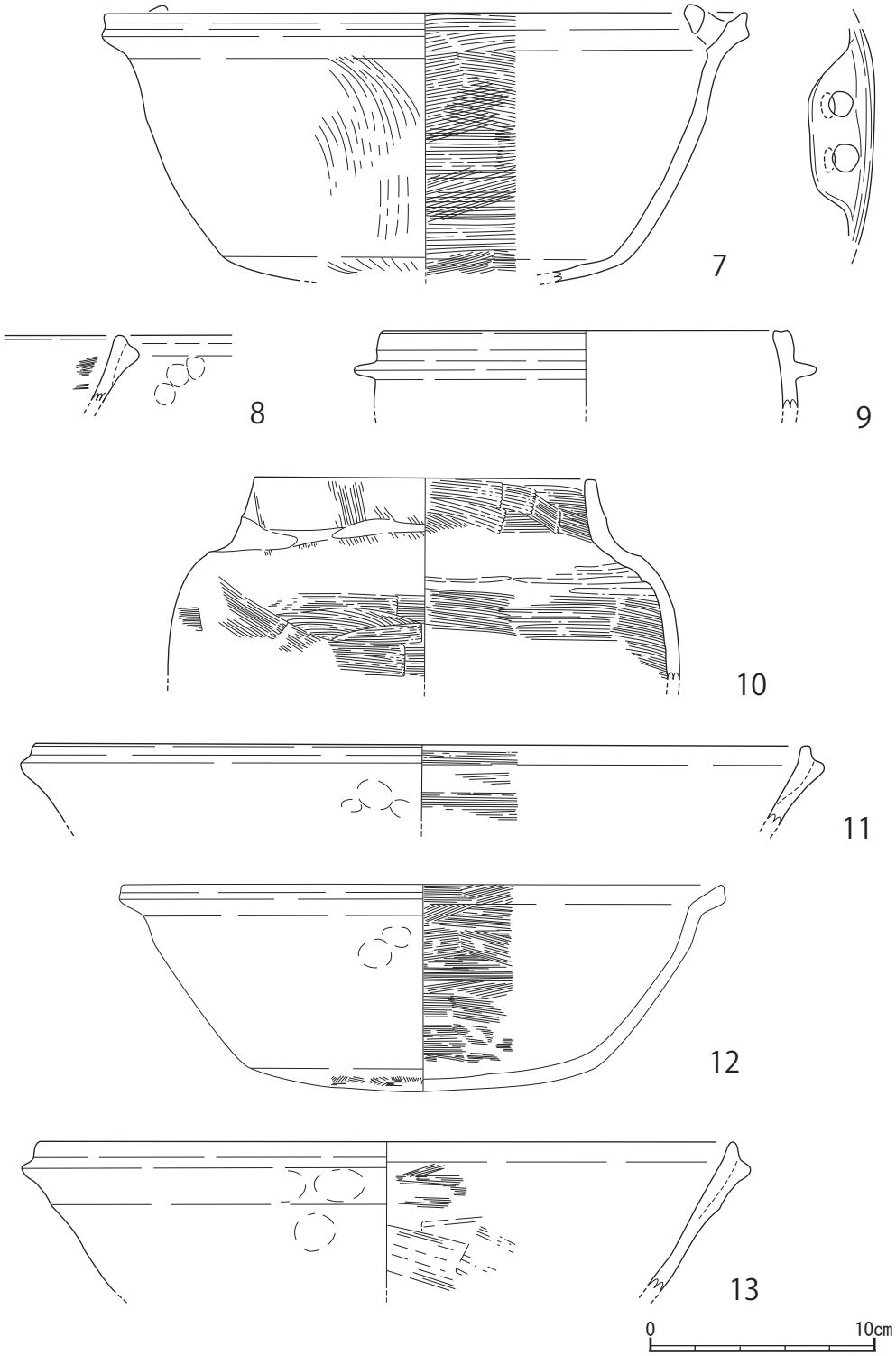
１から４は積石塚の中央部からまとまって出土したものである。１はすり鉢であるが外側面は口縁端部まで煤が付着しており、鍋として転用したものと考えられる。内側面は横方向のハケ目が、外側面は全体的に指頭圧痕が確認できる。２と３は釜Ｂの口縁部分で、４の体部から底部の破片は２と同一個体の可能性が高い。５は鍋Ｂの形態を有し、くびれから口縁までは長くやや内湾気味である。内面はナデ調整によって仕上げているが、底部周辺ではハケ目が確認できる。外面は縦方向のハケ目が観察できる。くびれよりも下方（体部中央辺り）から底部にかけて煤の付着が認められる。６は溝から出土したもので、鍋Ｆの形態を有し、口縁形態からⅢ類に分類した。

７は住居跡から出土した内耳鍋で、内側面には横方向のハケ目が、外側面には縦方向のハケ目が確認でき、外側面全体に煤の付着が観察できる。９は積石基壇状遺構から出土した鍋で、口縁がやや肥厚し端部が平坦に仕上げてあり、内外ともにナデによる調整が確認できた。鍋ＦのⅠ類に分類されるものである。10・14・16・17・19は土壙墓から出土したもので、10は釜Ｂに分類され、14は体部を外方に広げて鍔とし、その内側に口縁部を貼り付けたものである。11も同様のｂ類の貼り付けが観察でき、13と15も同様な鍔の貼り付けの可能性がある。これらは内外側面の調整方法も類似する。16は鍋Ｄの内耳鍋であり、遺構以外から出土している。18は16と類似しており、内耳鍋の可能性がある。

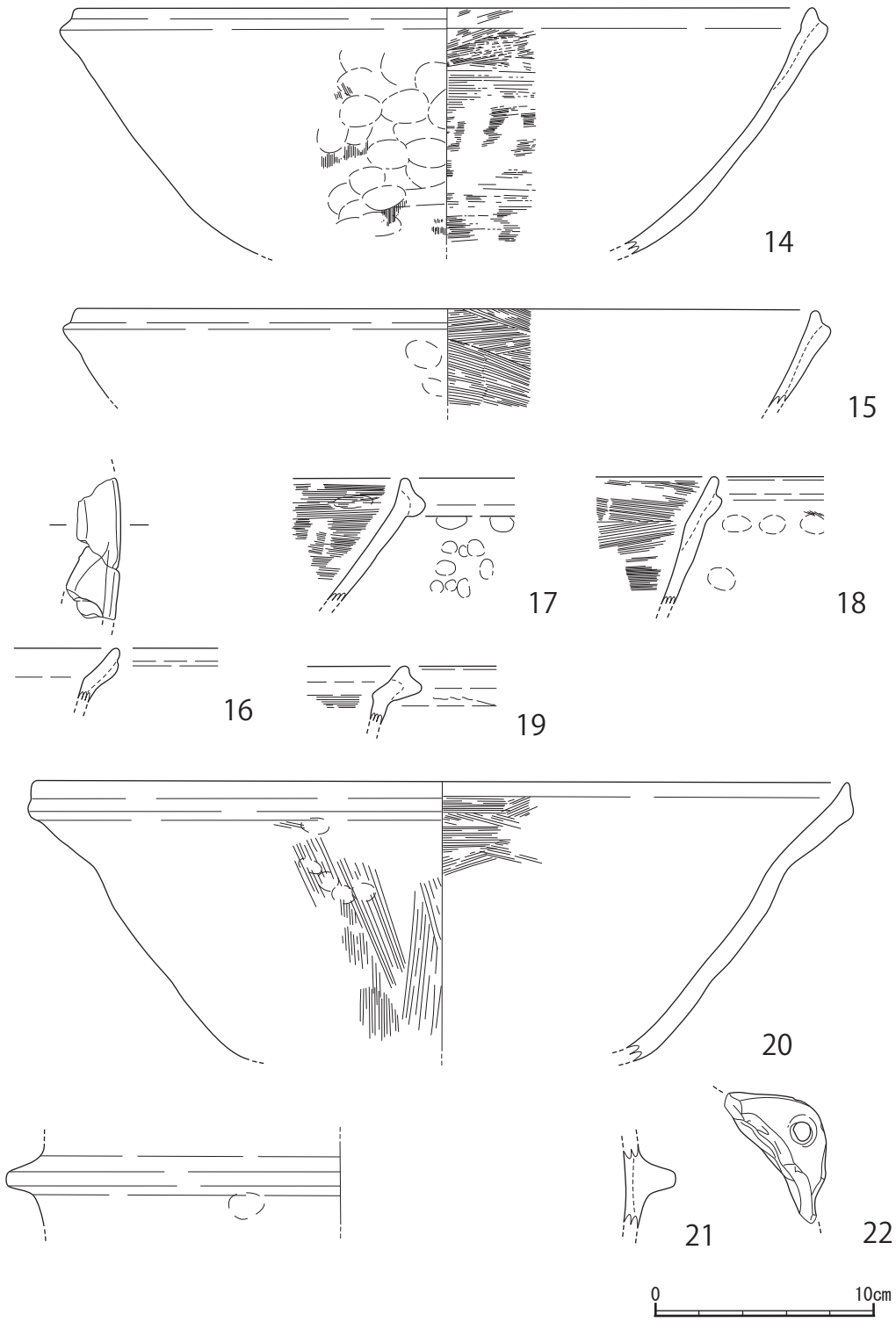
遺構外出土のものとしては、12も鍋Ｂの形態を呈し、口縁はくびれから短いものの直線的に延びるもので、口縁端部に沈線が巡り口縁下部まで煤が付着している。20もくびれを持つものであるが、口縁端部に鍔の形状を作り出していることから鍋ＦのⅤ類に分類した。体部には煤が付着している。８と13は鍋ＦのⅢ類とⅡ類に分類した。21と22は釜の体部と鐶付である。21は鍔の一部にわずかに煤の付着を確認することができた。



第４図　鏡千人塚遺跡出土煮炊具実測図（1）



第５図　鏡千人塚遺跡出土煮炊具実測図（2）

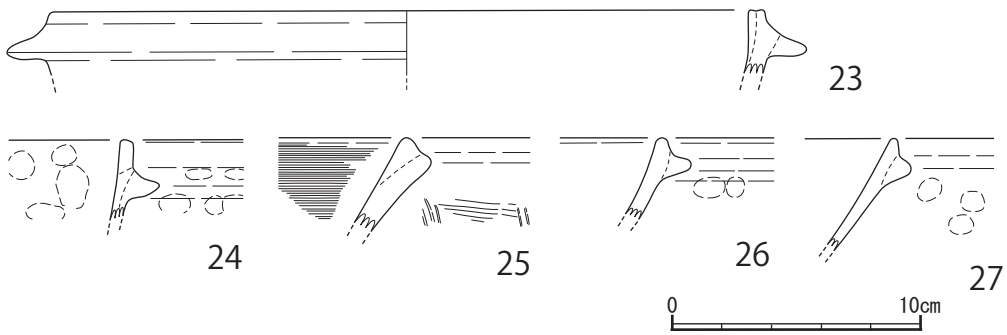


第６図　鏡千人塚遺跡出土煮炊具実測図（3）

鏡西谷遺跡

Ａ地区

本地区は調査区の北西端に位置し、現在は市道によって造成を受けた部分にあたる。中世の遺構は検出されていないが、土師質土器坏や皿などに加え、鍋も確認されている。いずれも口縁部の破片で、23 と 24 は口唇部を平坦にした鍋である。Ⅰ類に分類した。25 から 27 は口唇部を丸く仕上げたものであり、いずれも鍔の下部まで煤が付着している。25 は他２点よりも口縁部が厚く、25 はⅢ類に、26･27 はⅡ類に分類した。鍔の貼り付け方法も異なり、前者をｂ類、後者をａ類とした。

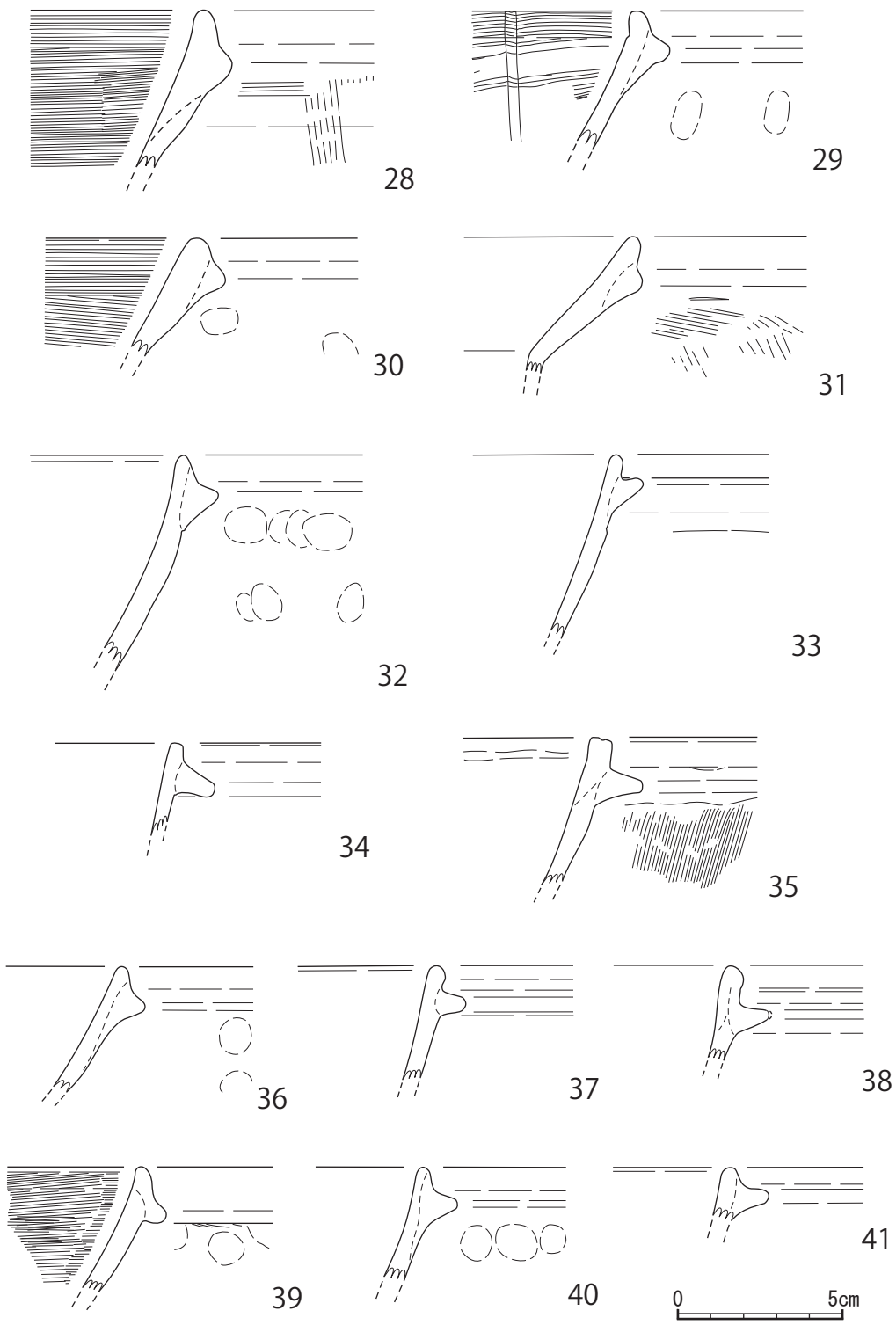


第７図　鏡西谷遺跡Ａ地区出土煮炊具実測図

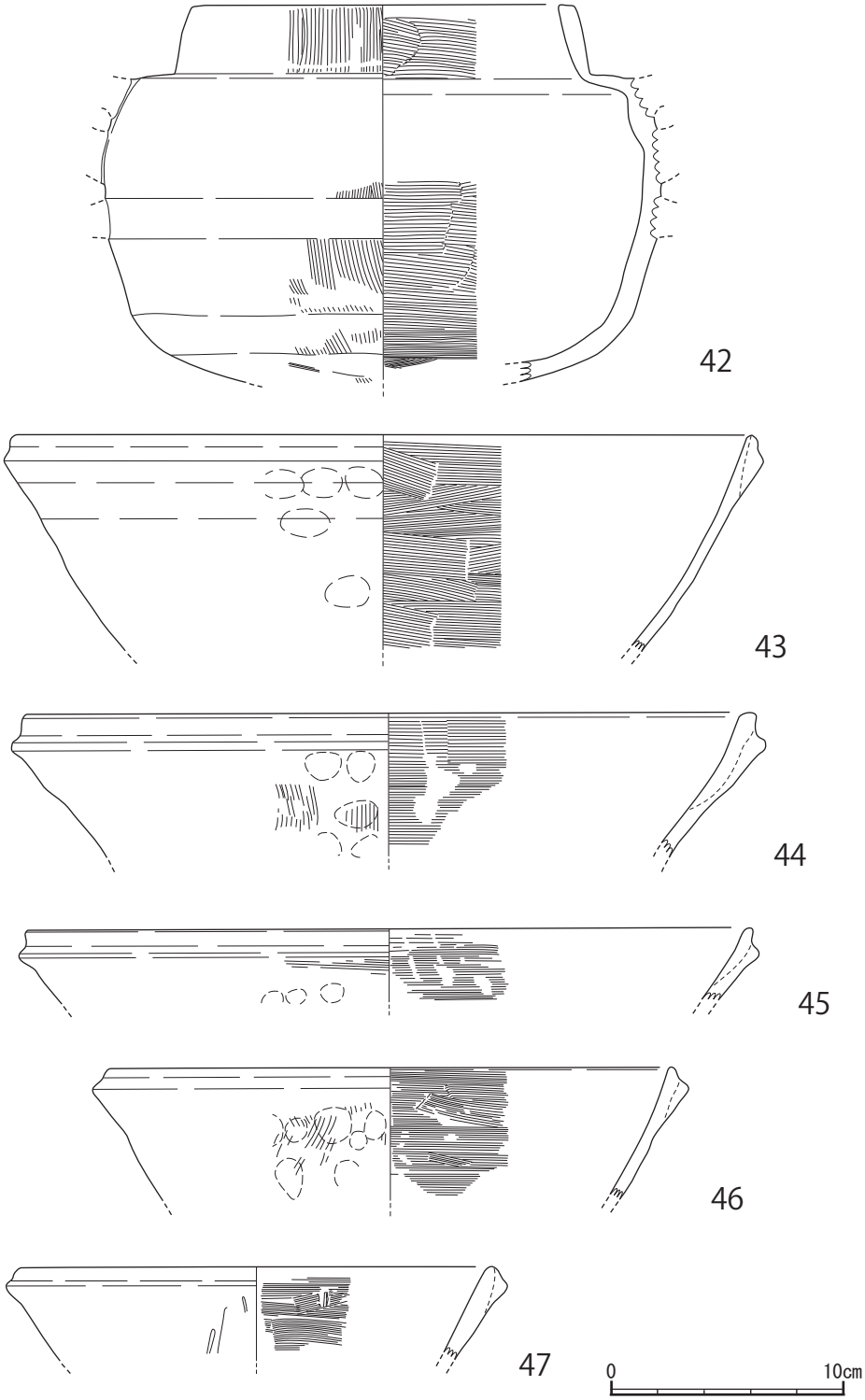
Ｂ地区

本地区はＡ地区の南東に位置し、Ａ地区同様に市道によって一部削平された場所にあたる。調査区北東部では 14 世紀後半から 15 世紀初頭（南北朝時代）の溝や土壙墓、柱穴状ピット群が検出され、北西部では土師質土器集中部が検出され 13 世紀前葉（鎌倉時代前期）の時期に位置付けられている。最も多くの計 56 点の煮炊具が確認された。

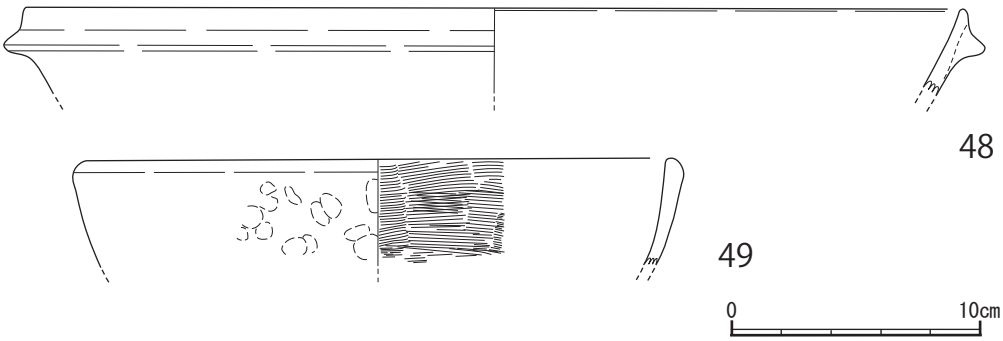
42 は釜Ｂに分類され、鐶付と鍔がはがれた痕跡が観察できるものである。鍔よりも上部に煤の付着が認められる。61 と 80 は内耳付の鍋Ｄで、61 は口縁端部まで煤の付着が顕著である。49・72・73 は鍔のない鍋Ｇに分類されるものである。外側面に煤の付着が認められたため煮炊具として分類した。内側面は横方向のハケ目、外側面はハケ目やナデ、指頭圧痕が確認できる。49 と 72 は口縁端部に丸みを持たせたもので、73 はやや稜を形成した断面コの字を呈するものである。



第８図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（1）



第９図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（2）

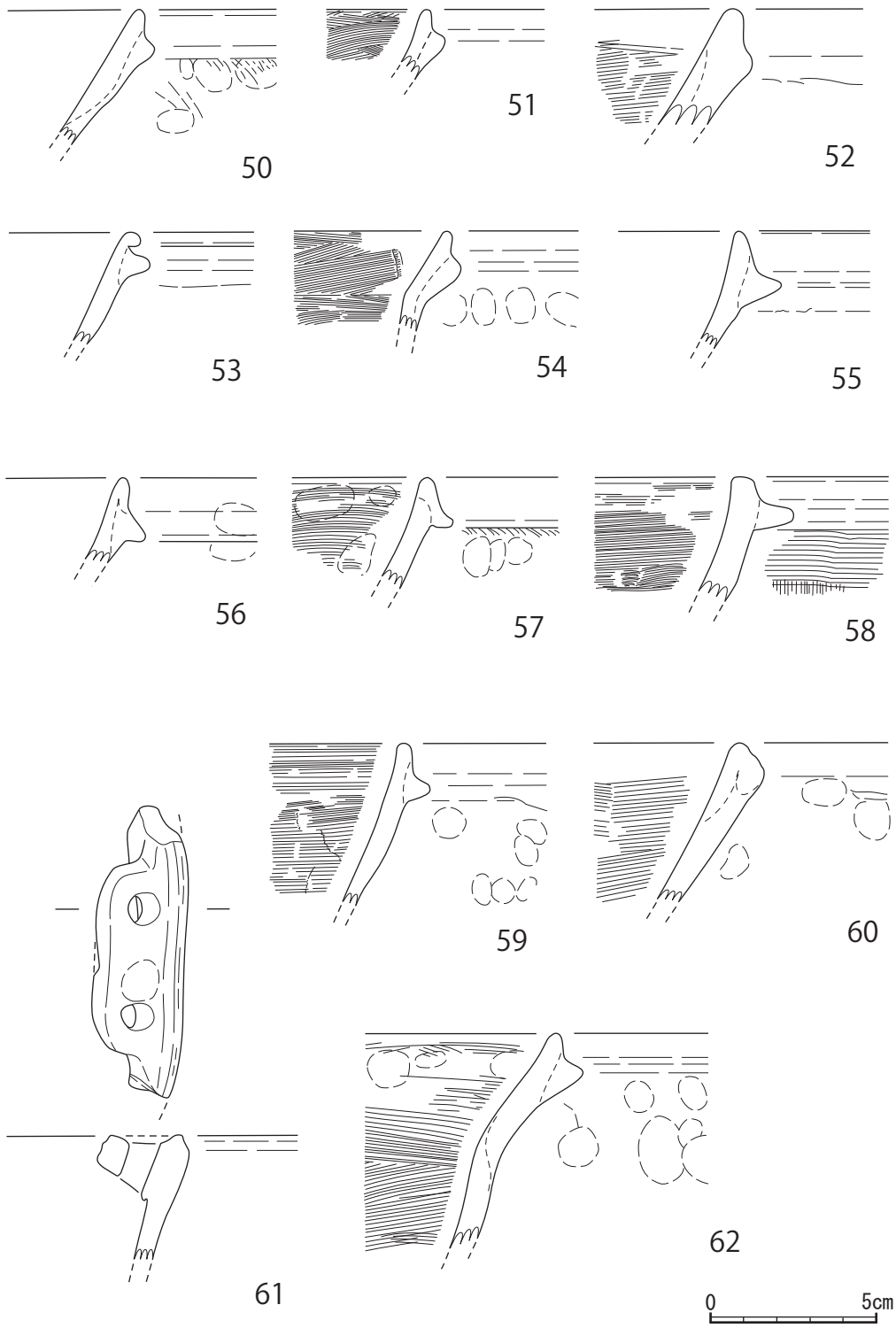


第 10 図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（3）

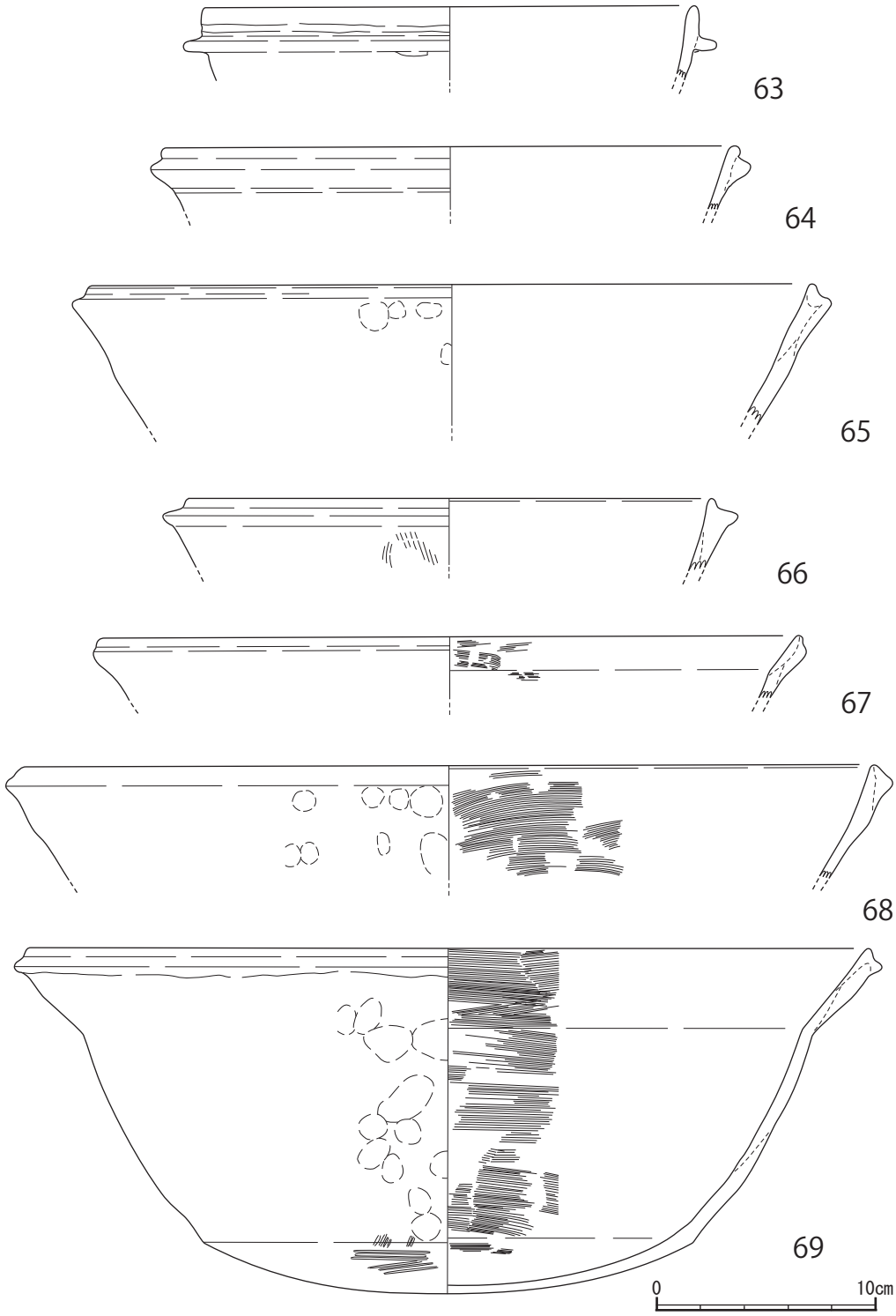
残りの 50 点は鍋Ｆに属するもので、34・35・70・76 はⅠ類に分類した。いずれも体部が上部に立ち上がり気味の１類で、鍔の下方まで煤が付着している。35 は口唇部の平坦面に沈線を施してややくぼみを持たせてある。鍔の貼り付けはいずれもａ類である。33・37 から 41・48・53・55 から 59・63・64・82 はⅡ類に分類した。多くの資料で鍔の下まで煤の付着が確認された。うち鍔の断面が三角形状を呈するものが 10 点、コの字を呈するものが６点で、貼り付けの技法はほとんどがａ類である。39 と 57 のみ口縁端部と鍔が一体あるいは貼り付けるために上から粘土をさらに貼り付けたと考えられるものであった。

28・29・32・36・43 ～ 47・50 ～ 52・65・66・71・74・75・77・78・83 はⅢ類に分類した。ほぼすべてが体部は外方に開くもので、煤の付着は鍔の下までのものがほとんどである。鍔の貼り付けはａ類が多く、ｂ類もそれに次ぐ量が確認された。

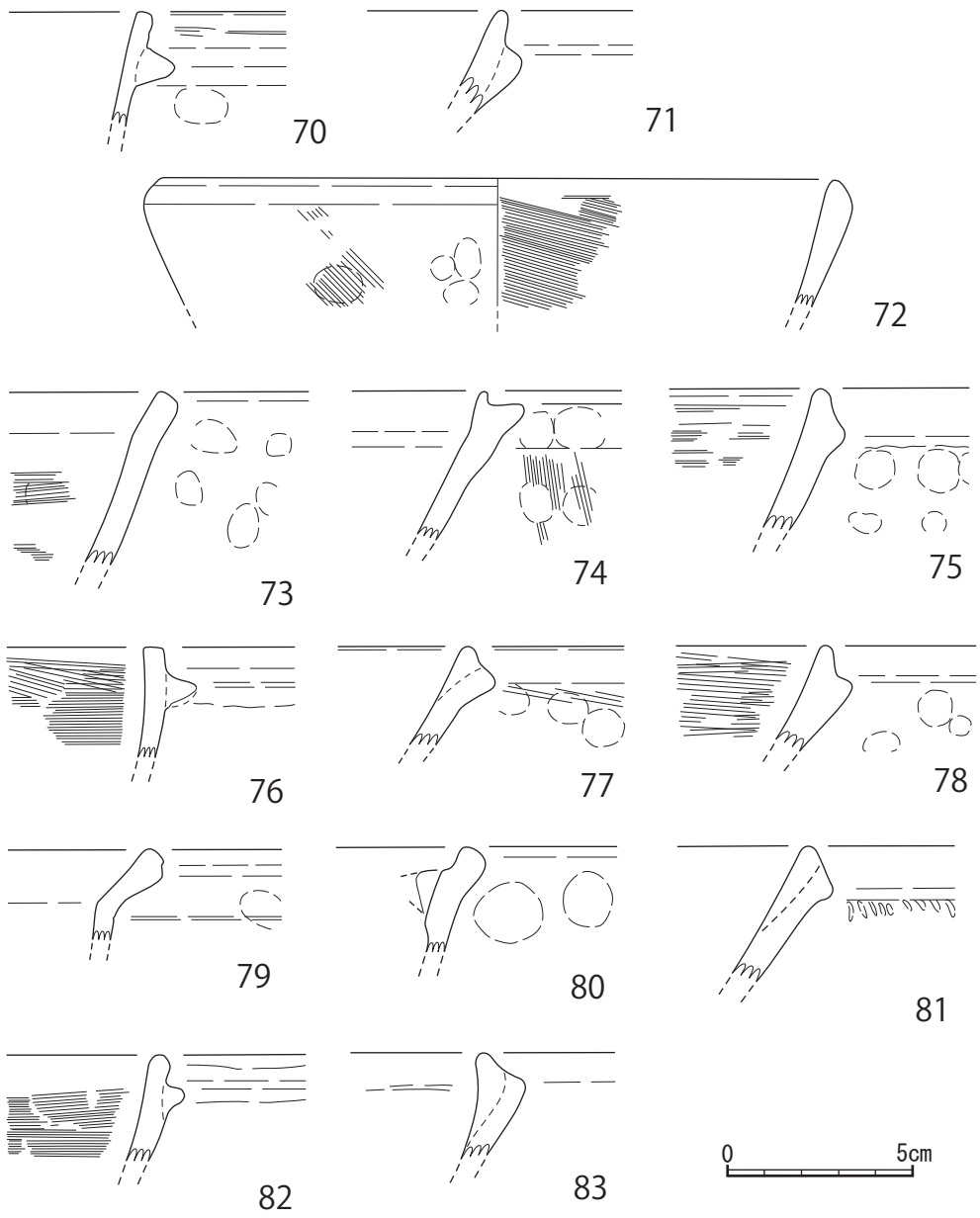
30・60・68・81 はⅣ類に分類した。体部は外方に開くものが多く、鍔の下部まで煤が付着している。30 と 68 は鍔部を貼り付けたａ類であるが、81 は外方に広げて鍔として内側に口縁部を貼り付けたｂ類、60 は口縁端部を折り曲げて鍔としたように見えｃ類に分類した。また、31・54・62・67・69・79 は、口縁下部がくの字にくびれたものでＶ類に分類した。31・62・69 は口縁端部からくびれまでが長く、他は短いものである。31 以外は口縁部まで煤が付着している。79 は鍔が明瞭でなく、鍋Ｂに近い形態を呈する。



第 11 図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（4）



第 12 図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（5）



第 13 図　鏡西谷遺跡Ｂ地区出土煮炊具実測図（6）

C地区

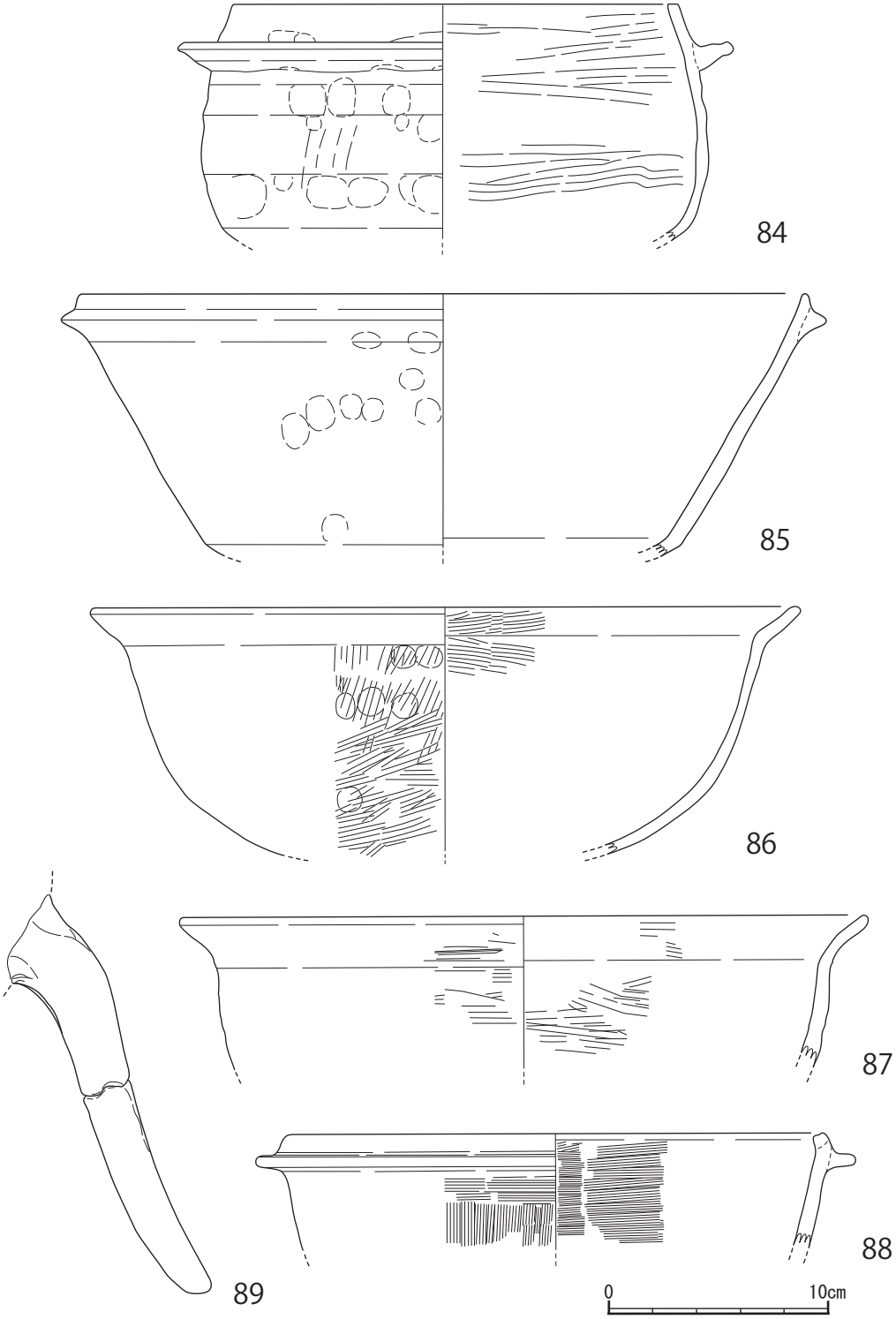
本地区は調査区の北東部、B地区の南東にあたる。市道の整備によってほとんどが削平されている。青磁や東播系須恵器などの出土によって鎌倉時代前期(13世紀前葉)に位置付けられる掘立柱建物跡や溝が検出されており、13世紀から15世紀の時期に収まる土師質土器の坏や皿も多く出土している。遺構内出土のものは少ないが、B地区に次いで多くの煮炊具41点を確認した。

86・87・104・105は、口縁部が外反して直線的に延びるもので、鍋Bに分類される。口縁外側面には端部まで煤が付着しており、内側面は横方向のハケ目が、外側面には縦方向のハケ目が確認できる。99は内耳のついた鍋Dで、内耳を貼り付けたのちに口縁端部から粘土を延ばして小さく突起状の鍔を形成したものと考えられる。鍔の下部まで煤の付着が顕著である。89は足鍋の脚部で、同一個体のものと考えられるものと合わせて3点確認された。確実に足鍋と判断できる資料は確認できなかったため体部や口縁の形態は不明であるが、足鍋も存在したことがわかる。106・109・120は口縁部を絞り直立させた鍋Bに分類されるもので、107は鍔の下部まで煤が付着している。D地区出土の141と形態が類似するものである。110は釜の鍔上方につけられる鐶付である。

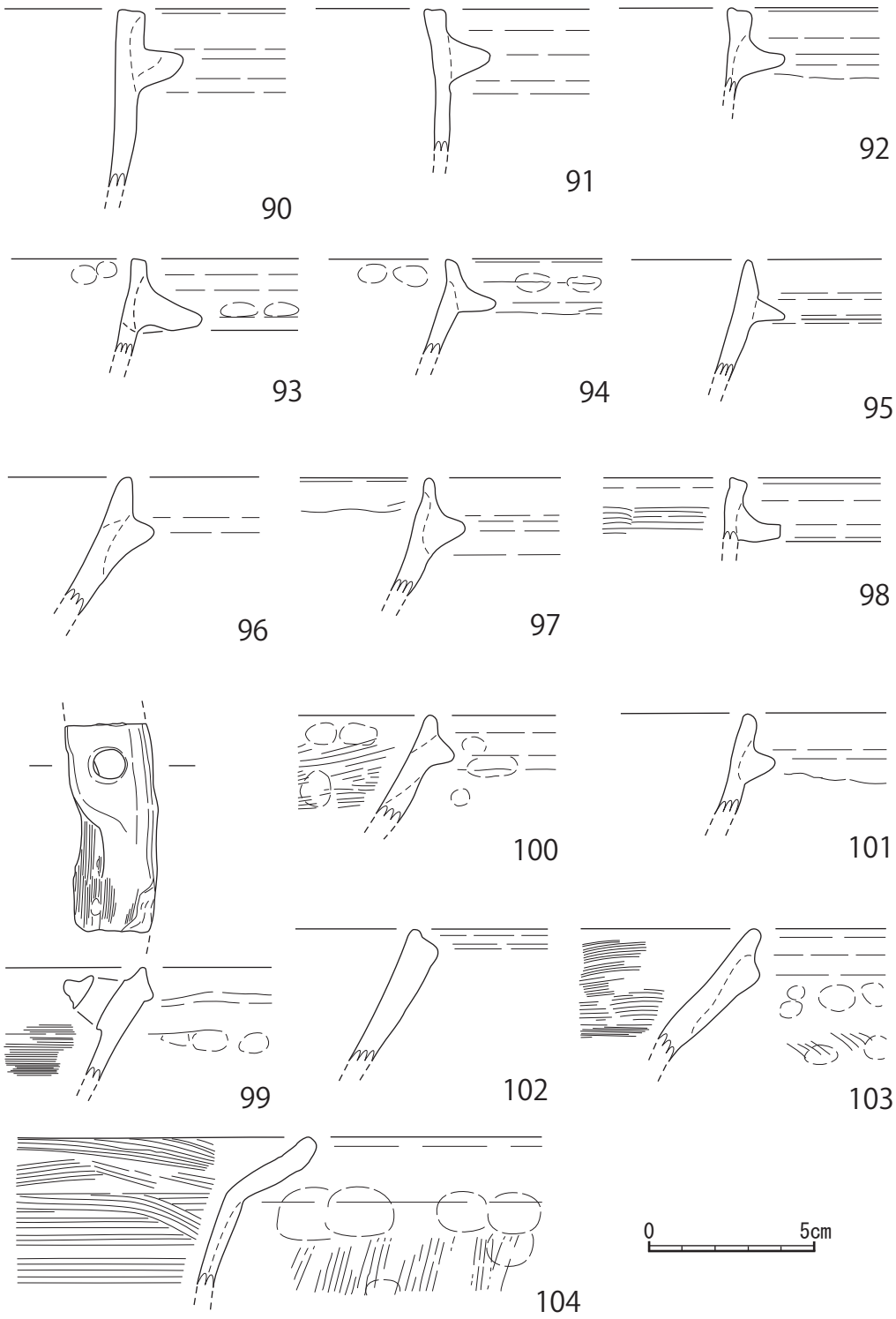
最も多い形態は鍋Fで、30点を確認した。84・88・90～93・98・112・121・122は、口縁端部を平面的に仕上げたものでⅠ類に分類される。84は体部が内側に傾き他とは異なり、胎土も全体的に黒色を呈する。外側面は鍔の端部から体部にかけて、煤の付着が確認できる。鍔の断面は84・88・98・122がコの字、90～93・112・121が三角形状を呈する。88・91・92は口縁端部上面がややくぼむ形状をしたものである。鍔の貼り付け方法については、いずれもa類に分類した。

85・94～97・100・101・111・119・123はⅡ類に分類されるもので、体部はやや開くものが大半を占める。119の鍔は断面がややコの字を呈するが、他のものは三角形状の鍔が付けられている。ほとんどの資料で鍔の下部まで煤が付着している。94と97の鍔は口縁部と一体で貼り付けられたc類に分類されるが、その他の資料はほとんどがa類である。

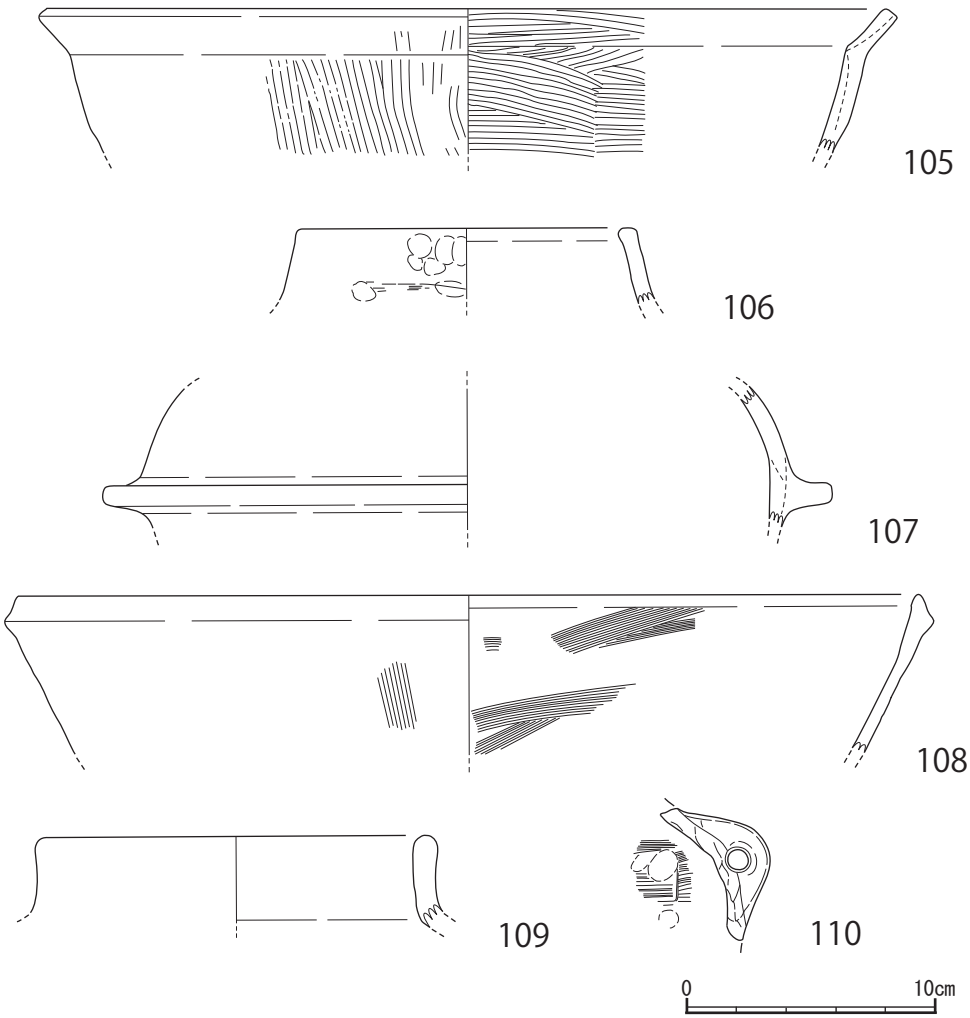
102・108・114・116～118は、鍔が不明瞭なⅢ類に分類される。102は鍋Gに近い形態を呈する。116以外は鍔の下部まで煤の付着が顕著である。113と115はⅣ類に分類され、口縁部と鍔が一体で貼り付けられたものである。103と124は口縁下がくの字にくびれたⅤ類に分類され、内側面は横方向のハケ目、外側面はハケと指で押さ



第 14 図　鏡西谷遺跡Ｃ地区出土煮炊具実測図（1）



第 15 図　鏡西谷遺跡Ｃ地区出土煮炊具実測図（2）

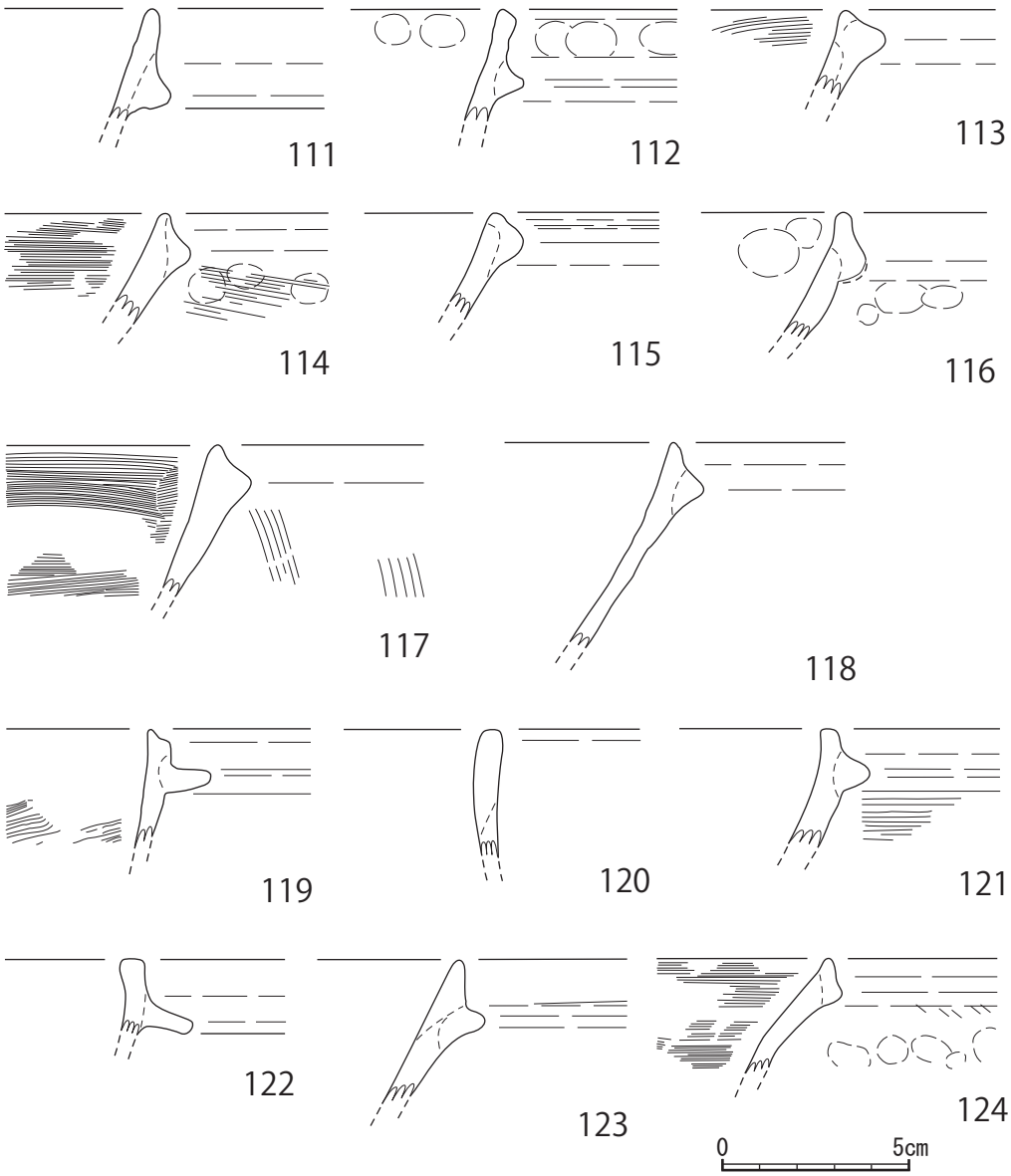


第 16 図　鏡西谷遺跡Ｃ地区出土煮炊具実測図（3）

えて仕上げた指頭圧痕が観察できる。

Ｄ地区

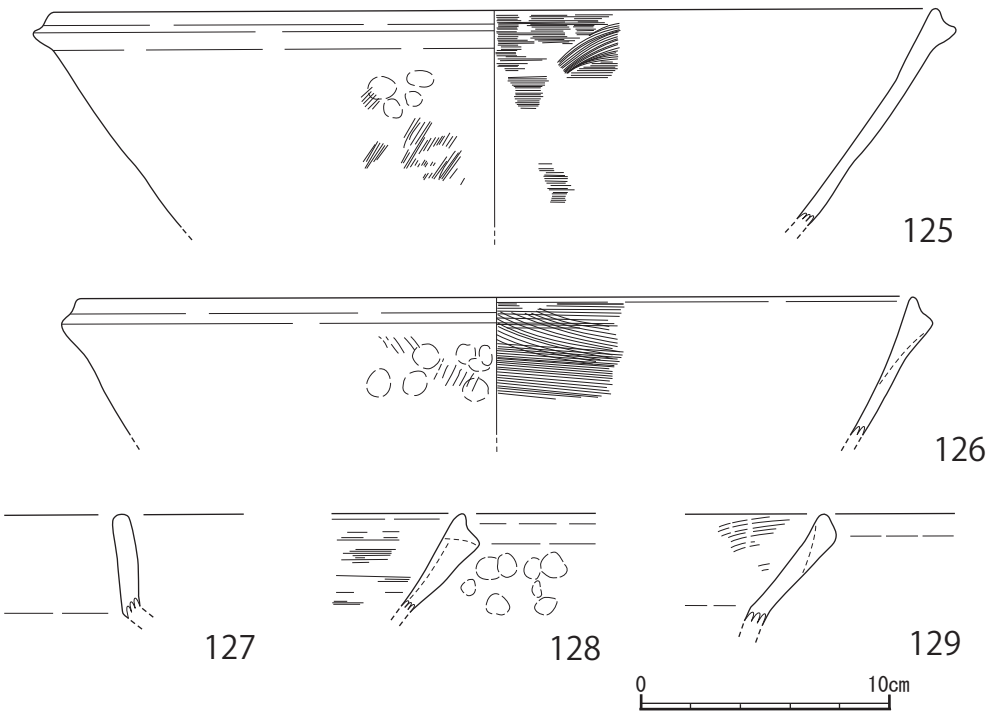
本地区は、Ｂ・Ｃ地区の南で、南東に延びる低丘陵部分にあたり、土壙墓や竪穴住居状の遺構などが検出され、鎌倉時代の遺物が出土している。125・126・128 は鍔の突起が緩やかなⅢ類に分類されるもので、内側面には横方向のハケ目、外側面は縦方向のハケ目と指頭圧痕などが観察でき、調整には共通性が認められる。129 は鍔の突起は明瞭でなく、頸部がくの字に折れ曲がっているためⅤ類に分類したが、鍋Ｂの形態に近いものである。127 は口縁部を絞り直立したもので、釜Ｂに分類される。



第 17 図　鏡西谷遺跡Ｃ地区出土煮炊具実測図（4）

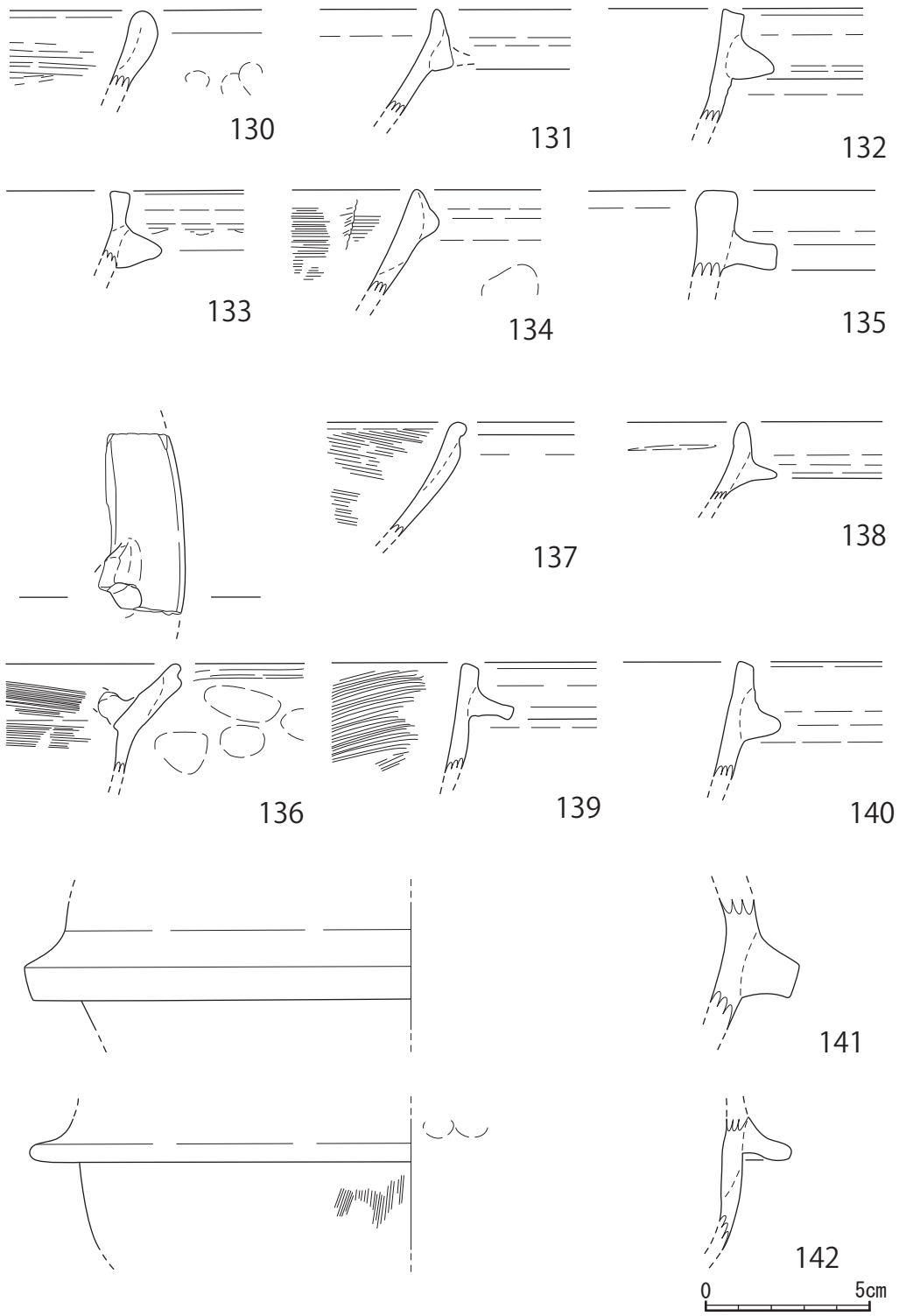
Ｅ地区

Ｅ地区はＤ地区の西、Ｇ地区との間の谷部にあたる。明確に中世に位置付けられる遺構は検出されていないが、北半を中心に中世前期の陶磁器や土師質土器坏・皿が出土している。130 は鍔の貼り付けがない鍋Ｇに分類できるもので、口縁端部まで煤

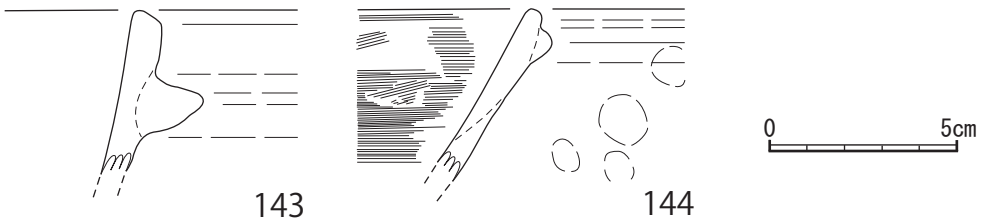


第 18 図　鏡西谷遺跡Ｄ地区出土煮炊具実測図

の付着が確認できる。口唇部は粘土を折り返して成形したような調整が観察できる。131 は摩滅のため不明瞭であるが鍔の上部が欠損している可能性があり、138 に類似するものである。144 とともにⅡ類に分類した。鍔の下方まで煤の付着が確認できる。132・133・135・139・140・143 はⅠ類に分類され、いずれも体部がやや直立するものである。133 以外は鍔の下部まで煤が観察される。134 は鍔の突起が弱くⅢ類に分類した。136 は内耳をもつ鍋Ｄである。141 と 142 は鍔を貼り付けた体部の破片であるが、釜Ｂに分類した。141 は厚い鍔を巡らせ体部も厚く、胎土や色調から瓦質土器の範疇に入るものと考えられる。142 は鍔の下まで煤の付着が顕著である。137 は口縁端部まで煤が付着しており、鍔のというよりも内側に口縁を貼り付けて外側面をくぼませたもので、焙烙に近い形態のものである。137 と 141 は時代がやや下るものの可能性がある。



第 19 図　鏡西谷遺跡Ｅ地区出土煮炊具実測図（1）



第 20 図　鏡西谷遺跡Ｅ地区出土煮炊具実測図（2）

Ｆ地区

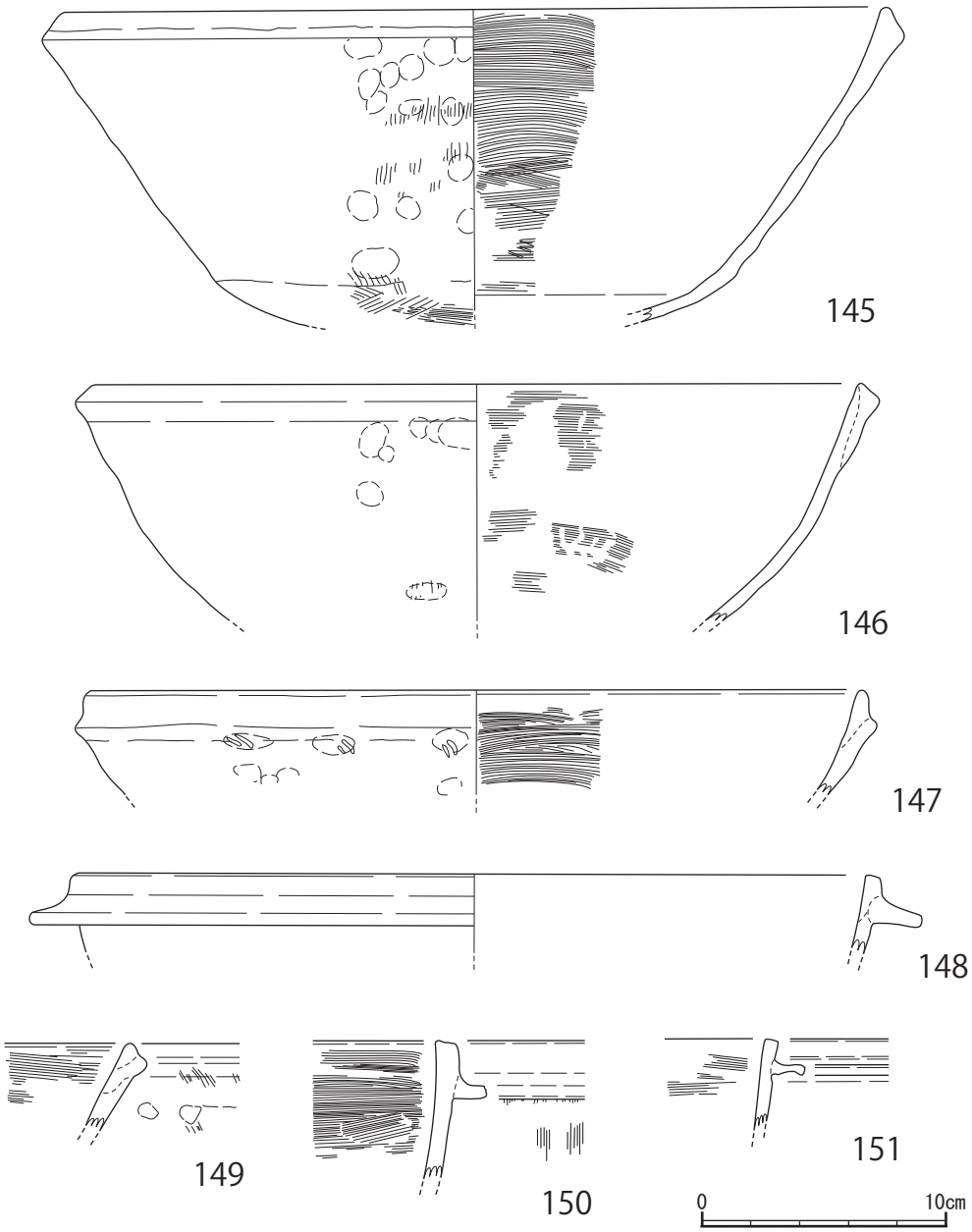
本地区はＧ・Ｅ地区の南、南東に細長く伸びる丘陵部分で、南東端の裾部で鎌倉時代の掘立柱建物や土壙墓などが、また北西部分の丘陵上面で室町時代の溝や柵状遺構などが検出されている。145・146・149 は鍔上面が直線的なものでⅣ類に分類した。内外面の調整には共通性が認められる。煤の付着は 145 と 146 で認められ、鍔下部まで確認できる。147 は口唇部から鍔までがやや長いもので、貼り付けはｂ類に分類される。148・150・151 は口縁端部を平坦に調整したⅠ類のもので、ともに広い鍔が付けられている。貼り付け方法もａ類に分類される。

Ｇ地区

Ｇ地区は南東方向にＥ地区と隣接した丘陵斜面から裾部にあたる場所である。中世の遺構は検出されていないが、土師質土器の坏や皿などがわずかに出土している。鍋も数点確認された。152 と 153 はⅢ類に分類され、共に鍔よりも下に貼り付けの痕跡が観察できる。152 は特に鍔の突起が弱く、鍋Ｇに近いものである。鍔の下部まで煤の付着が顕著である。155 は鍔上面が直線に近いためⅣ類に分類した。154 は他と比較して胎土が緻密で、表面の色調も赤味を帯びているが、表面の調整に共通な点が認められたためＶ類に分類して報告したが、他とは時期が異なる可能性がある。

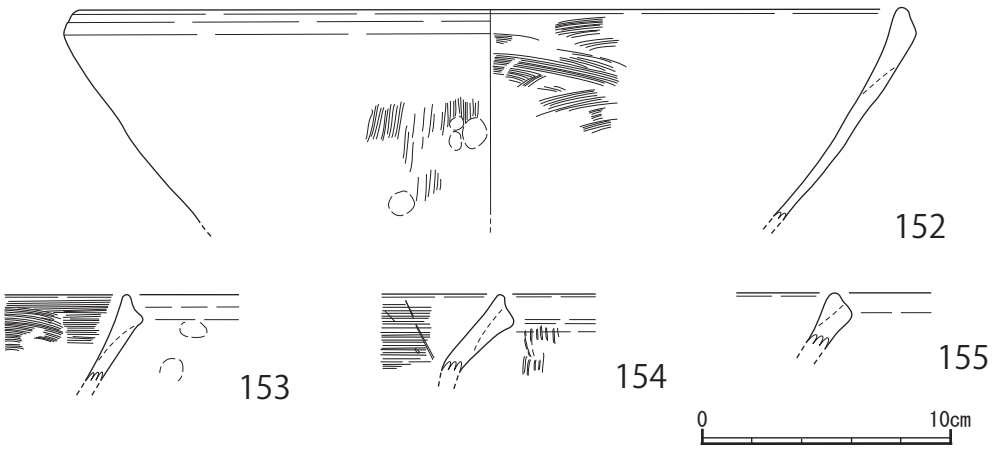
Ｈ地区

調査区南端の南東に延びる丘陵部分にあたるが、現在は削平され農場の一部となっている。中世の遺構としては、造成されたと考えられる平坦面や柵状遺構が確認されている。出土遺物からは室町時代前半から中頃と考察されている。156 は鍔の突起が



第 21 図　鏡西谷遺跡Ｆ地区出土煮炊具実測図

明瞭でなく、外側面は摩滅も認められる。内側面は横方向のハケ目が確認できる。形態はⅢ類に分類したが、鍋Ｇに近い資料である。鍔の貼り付けはｂ類に分類できる。157 は口縁端部を平坦に仕上げたもので、体部の傾きも立ち上がりが強く、Ｉ類に分類した。胎土や色調からは、瓦質土器のような印象を受ける資料である。



第 22 図　鏡西谷遺跡Ｇ地区出土煮炊具実測図

第 23 図　鏡西谷遺跡Ｈ地区出土煮炊具実測図

５．考察　－鏡地区出土の煮炊具の特徴－

(1) 器種組成および形態分類

第１表の基準に従って分類した結果、鏡地区出土資料においては鍋Ｂ・鍋Ｄ・鍋Ｆ・鍋Ｇ・釜Ｂを確認することができた。鍋Ｂは、くの字状に外反した口縁が直線的に延びるもの、鍋Ｄは口縁の内側に耳を付けたもの、鍋Ｆは口縁外側に鍔が巡るもの、鍋Ｇは口縁外側に突起がないが煤の付着があるもの、釜Ｂは口縁部を絞り直立させて体部に鍔を巡らしたものである。釜Ｂに分類したものの体部にはいずれも煤が付着しており、囲炉裏や焚火などにかけて使用されたと考えられるものであった。体部や鍔部のみのものあるいは鐶付のみの資料においては釜の用語を用いて分類したが、釜Ｂの形態を呈するものの可能性が高いため、以下釜Ｂに加えて論じる。

鏡千人塚遺跡から出土した資料 22 点のうち、釜Ｂは６点(27%)、鍋Ｂは２点(９%)、

鍋Ｄは２点（9%）、鍋Ｆは 12 点（55%）である。鍔を巡らせた鍋Ｆが主体を占め、口縁形態からさらに細分すると、口縁端部上面を平面的に仕上げ、直下にコの字あるいは三角形状の鍔を巡らせたⅠ類が１点、口縁端部を丸く収め、直下にコの字あるいは三角形状の鍔を巡らせたⅡ類が３点、鍔の突起やくびれが明瞭でなく、なだらかに整形したⅢ類が４点、口縁端部から鍔の先端が直線的なⅣ類が１点、口縁端部に鍔を巡らせ口縁下方がくの字状にくびれるⅤ類が３点であった。体部はⅠ類が直立ぎみの１類であり、Ⅴ類の２点についてもやや直立する１類に分類される。

鏡西谷遺跡の資料 135 点のうち、釜Ｂが９点（７%）、鍋Ｂ・鍋Ｄ・鍋Ｇがそれぞれ４点（各３%）、鍋Ｆが 112 点（83%）に分類された。そのほか、足鍋の脚部が数点確認されており、足鍋も利用されていたことがわかる。鏡西谷遺跡においても鍋Ｆが主体を占め、その大部分を占めているといえる。口縁形態で細分すると、Ⅰ類が 26 点、Ⅱ類が 31 点、Ⅲ類が 36 点、Ⅳ類が９点、Ⅴ類が 10 点で、鏡千人塚と比較してⅠ類の比率が高いことがわかる。これは時間幅によるものと考えられるため時期的変遷については後述する。Ⅰ類は体部が直立気味の１類（85%）がほとんどであり、Ⅱ類は体部が外方に開く２類（55%）が半数を占める。またⅢ類では２類（92%）が大半を占め、Ⅳ類も２類（78%）が多いといえる。くびれのあるⅤ類は、くびれよりも下の体部が直立方向に湾曲することになるため１類（60%）も多いことが指摘できる。鍔の明瞭なものは直立するものが多く、鍔が不明瞭なものほど体部が開くものが多いという特徴がうかがえる。

（2）製作技法

次に、鍋・釜類の表面調整や鍔の貼り付けなどの製作技法について考察する。鏡千人塚遺跡においては、内側面の調整は横方向のハケ目が多くの資料で認められ、ナデ調整を加えたものやナデのみで仕上げたものが少量確認された。外側面については、縦方向のハケ目が確認できるものが数点存在するが、ナデ調整や指頭圧痕が顕著に認められるのが特徴である。鍔の貼り付けについては、体部に鍔を貼り付けたａ類が釜Ｂで２点観察された。また、体部を外方に折り曲げて鍔とし、その内側に口縁部を貼り付けるｂ類が鍋Ｆで５点、口縁と鍔が一体になったものも鍋Ｆで２点確認された。口縁端部と鍔の先端までの部分はナデによって調整されているものがほとんどで、一部ヘラによって調整したため、くぼみや沈線が残されているものも確認することができる。

鏡西谷遺跡における製作技法の特徴として、釜Ｂの口縁部についてはＢ地区出土資料のみ内外面にハケ目が確認できるが、その他のものについては内外面ともにナデによって仕上げられている点が指摘できる。鍋Ｂはいずれも Ｃ地区で出土したものであるが、内側面は横方向のハケ目、外側面には縦や横のハケ目に加えてナデや指頭圧痕を観察することができた。鍋Ｄについては、Ｂ地区出土資料は内側面がナデ、外側面はナデと指頭圧痕が観察できるものであるが、Ｃ・Ｅ地区で出土した資料は体部内側面に横方向のハケ目が顕著で、外側面はナデと指頭圧痕が観察できる点で区別される。鍋Ｆについては、Ｉ類の内側面はナデとハケによって、また外側面はナデによって仕上げたものが多く、一部で縦や横のハケ目が観察できる。Ⅱ類では内側面はナデが認められるものが多く、外側面はナデおよび指頭圧痕を多くの資料で確認することができる。またⅢ類については、内側面は横方向のハケ目が多くの資料で観察でき、外側面はナデと指頭圧痕が顕著である。一部の資料では外側面にハケ目を施したものも確認できた。Ⅳ類についても内側面は横方向のハケ目が、外側面はナデと指頭圧痕が観察できる。Ｖ類についても内側面は横方向のハケ目、外側面はナデと指頭圧痕が顕著な点が特徴である。鍋Ｇについても内側面にはハケ目が顕著で、外側面にはナデと指頭圧痕を確認することができた。

また、鍔の貼り付けにおいては、Ｉ類は貼り付けが観察できた資料すべてがａ類であった。Ⅱ類においてはａ類（84%）が主体を占め、ｂ類（３%）とｃ類（13%）もわずかに確認された。Ⅲ類においてはａ類（25%）とＢ類（25%）が同数を占め、Ⅳ類においては口縁と鍔部を一体で作り上げるｃ類（44%）が多くを占めていた。Ｖ類においてはａ類が半数を占める状況がうかがえた。

（3）時期的変遷

時期が明確な遺構から出土した煮炊具資料が少ないため、時期的な変遷を追うのは難しいが、各調査区の出土遺物から推定されている遺構の年代を参照し、時期を追って煮炊具の形態変化について考察してみたい。

鏡西谷遺跡のＦ地区では調査区南東部の掘立柱建物跡や土壙墓が検出され、13 世紀初頭（鎌倉時代初頭から前葉）に相当する遺構とされている。これらの周辺からは鍋Ｆが３点（148･150･151）出土している。いずれも口縁端部上面を平面的に仕上げ、直下にコの字あるいは三角形状の鍔を巡らせたＩ類に分類されるものである。体部は直立気味の１類で、鍔の貼り付けはいずれもａ類に属するものである。

Ｃ地区の北東部で検出された掘立柱建物跡は 13 世紀前葉（鎌倉時代前期）に位置付けられており、この周辺で出土した資料には鍋Ｂに分類されるもの４点（86・87・104・105）、鍋Ｆに分類されるものが 15 点出土している。鍋ＦはⅠ類が７点（84・88･90 から 93･98）で、体部の傾きは１類、鍔の貼り付けはａ類である。Ⅱ類は６点（85･94 から 97・100）で、体部の傾きは２類、鍔の貼り付けはａ類が主体であるがｂ類１点とｃ類２点も確認された。Ⅲ類は１点（102）確認され、体部は外方に開く２類である。Ⅴ類は１点（103）確認され、体部の傾きは１類で、鍔の貼り付けはａ類であった。これらのことから、Ｃ地区ではⅠ類とⅡ類が主体を占める状況がうかがえる。さらに、掘立柱建物跡に伴う鍋に限定してみると、鍋Ｂが４点（86・87・104・105）、鍋Ｆは８点（84・85・88・90 ～ 93・96）となり、鍋Ｆは２点を除き、残りすべてⅠ類である。鍋ＦのⅠ類を主体に、鍋Ｂの組み合わせを基本とする組成が認められる。

Ｂ地区においても、調査区の北西部において 13 世紀前葉（鎌倉時代前期）の遺構（土師質土器集中部）が検出されており、それらの周辺から出土した資料は、Ⅰ類が１点（70）、Ⅱ類が２点（63・64）、Ⅲ類が３点（65・71・74）である。鍔の貼り付けはａ類が主体である。さらに調査区北東部では、14 世紀後半から 15 世紀初頭（南北朝時代）の溝や土壙墓などが検出されており、周辺からは鍋Ｆが 14 点、鍋Ｇが１点出土している。鍋ＦはⅠ類は１点（35）で体部の傾きが１類であり、Ⅱ類も１点（53）であるが体部の傾きが２類で、鍔の貼り付けはいずれもａ類である。またⅢ類は 10 点確認され、体部の傾きはいずれも２類で、鍔の貼り付けはａ類が４点（29・43・46・47）、ｂ類が３点（44・45・50）、ｃ類とｄ類が各１点（52・28）確認された。Ⅳ類とⅤ類も各１点（30･54）確認でき、貼り付けはいずれもａ類であった。鍋Ｇも１点（49）のみ確認されている。

Ｆ地区では調査区北西部の溝や柵状遺構など室町時代前半から中頃の遺構も検出されており、周辺からは鍋Ｆが４点（145 ～ 147・149）出土している。Ⅲ類とⅣ類に分類されるもので、鍔の貼り付けはｂ・ｃ・ｄ類を各１点確認することができた。

さらに、鏡千人塚遺跡は 15 世紀後半（室町時代前半）の時期までに収まると位置付けられており、鍋Ｂが２点、鍋Ｄが２点、鍋Ｆが 12 点確認された。鍋ＦはⅠ類が１点（9）、Ⅱ類が３点（11・13・17）、Ⅲ類が４点（6・8・14・15）、Ⅳ類が１点（1）、Ⅴ類が３点（18 ～ 20）であった。鍔の貼り付けは、確実にａ類に分類される資料が確認されず、ｂ類が５点、ｃ類が２点確認された。この時期にｂ類の貼り付けが一定量認められることは、同様の貼り付け方法によって製作された鍋が、14 世紀末から

15 世紀初頭以降に出現するという吉野（2012）の指摘と矛盾しない。また、内耳鍋は安芸地方では 16 世紀前半に一般化する機種とされる（吉野 2001）。鏡千人塚遺跡出土の鍋Ｄをどのように評価するか、あるいは他の調査地点で出土した内耳鍋（鍋Ｄ）の時期をどう位置づけるかなど、西条盆地における煮炊具の変遷を議論するうえで注意すべき器種だといえる。

前述した特徴は、異なる時期の資料を含んでいる可能性があるため、時期的変遷を検討するにはやや強引ではあるが、大まかには以下のようにまとめることができる。鏡地区出土の鍋Ｆは、13 世紀前葉の鎌倉時代前期に位置づけられる鏡西谷遺跡Ｆ地区（南東部）やＣ地区掘立柱建物跡においてⅠ類の利用が確認され、Ｃ地区では口縁部が外反して直線的に延びる鍋Ｂと足鍋がそれに加わる。鍋Ｆの形態はⅠ類を主体にⅡ類も認められる状況がうかがえた。鍔の貼り付けはａ類が主体である。また、別の調査地点（Ｂ地区北西部）では 13 世紀前葉に鍋ＦのⅢ類が認められたが、時期が明確な遺構出土資料のみによる検討が必要である。さらに 14 世紀後半から 15 世紀初頭（Ｂ地区北東部）にはⅢ類の増加が認められ、鍔の貼り付けにｂ類などの別の方法が加わる。15 世紀後半になると、鍔が明瞭でないⅢ類やⅣ類が多く出土する傾向がうかがえ、鍔の貼り付けはｂ類が多くなるという変遷が認められる。鍋Ｄはこの時期になって複数点の出土が確認できる。

以上のように、鏡地区出土の煮炊具資料においては、口縁端部上面を平面的に仕上げ、断面がコの字や三角形状の明瞭な鍔をもつものから、次第に口縁端部を丸く収め三角形状の突起の弱い鍔へと変化し、さらには鍔の不明瞭なものへと形態が変遷していく状況が読み取れる。また鍔の貼り付け方法においても、鍔を単独で貼り付けるものから、体部を外方に延ばして鍔とし、その内側に口縁部を貼り付けるものが現れる変化を確認することができた。

６．まとめと課題

本稿では、鏡山城跡南麓の鏡地区に位置する遺跡のうち鏡千人塚遺跡と鏡西谷遺跡から出土した資料約 160 点を報告した。それらの資料において口縁から鍔にかけての形状や鍔の貼り付けなどについての形態分類を行った結果、煮炊具の形態には口縁直下に鍔を巡らせたもの（鍋Ｆ）が大部分を占め、口縁下がくの字に外反するもの（鍋Ｂ）も少量存在することが明らかとなった。また、口縁部を絞り直立させたもの（釜Ｂ）も確認することができた。鍋Ｆには吉野分類のＡ類（安芸型：Ｆ－Ａ）とＢ類（西条

型：Ｆ－Ｂ）を含むが、Ａ類は確認されなかった。これらの点は、Ｂ類（西条型）が西条盆地において濃密な分布を示すという吉野の論考を支持するものであり、鏡地区出土資料の考察によって、西条盆地における煮炊具の様相解明に一定の成果を示すことができた。

また、鏡地区出土資料によって中近世煮炊具の特徴について検討を試みたが、形態分類や製作技術、また大まかな変遷を考察したにすぎず、生産や流通あるいは利用法などの具体的な議論を行うことはできなかった。本地区周辺では、鏡東谷遺跡や陣が平西遺跡などからも中近世の煮炊具が出土している。今回、時期的な変遷を追う上でも十分な検討が行えなかったため、今後これらの資料の整理を進め、鏡地区の遺跡で利用された煮炊具について改めて考察するとともに、西条盆地あるいは安芸地方全域に地域を広げて煮炊具の様相について検討することを今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、広島県立歴史博物館の尾崎光伸氏、東広島市出土文化財管理センターの石垣敏之氏、特定非営利活動法人広島文化財センターの重森正樹氏には土師質土器についてご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

岩崎仁志　2007 「山陽西部における中世の土製煮炊具－周防・長門を中心に－」『中近世土器の基礎研究』21　土製煮炊具の諸様　日本中世土器研究会　51 ～ 68 頁

植田千佳穂・伊藤　実・佐々木直彦・嶋田　滋・福島政文・鍛治益生『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告－清水奥山遺跡・東ガガラ窯跡・鏡千人塚遺跡－』広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学

鈴木康之　1985 「広島県における中世土師器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会　49 ～ 54 頁

鈴木康之　1996 「土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ｖ中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編　156 ～ 226 頁

永田千織・藤野次史 2009「安芸地方における中世陶磁器の研究－広島大学東広島キャンパス鏡地区出土資料を中心として－」『広島大学埋蔵文化財調査室調査研究紀要』第１号　広島大学埋蔵文化財調査室　１～ 86 頁

永田千織・藤野次史・八幡浩二　2011 「安芸地方における瓦器の研究」『広島大学埋蔵文化財調査室調査研究紀要』第２号　広島大学埋蔵文化財調査室　１～ 108 頁

永田千織･藤野次史　2012 「安芸地方における中世須恵器の研究－西条盆地の出土資料を中心として－」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第３号　広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門　１～ 116 頁

永田千織・藤野次史　2014 「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（上)」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第５号　広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門　１～ 52 頁

永田千織・藤野次史　2015 「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（下)」『広島大学埋蔵文化財調

査研究紀要』第６号　広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門　１～70 頁
藤野次史・増田直人　2003『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　農場地区の調査　広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室
藤野次史・永田千織・石井隆博・吉野健志　2013 『鏡山城跡発掘調査報告書－重要遺跡（鏡山城跡ががら地区）範囲確認事業に係る発掘調査－』 東広島市教育委員会文化財調査報告書第 43 集　東広島市教育委員会
吉野健志　2001 『土居遺跡発掘調査報告書』 文化財センター調査報告書第 31 冊　財団法人東広島市教育文化振興事業団
吉野健志　2012 「出土土器から見た安芸地方の様相」『シンポジウム安芸地方の中世を探る－中世前期を中心として－』 広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会　37 ～ 44 頁

第２表　鏡千人塚遺跡および鏡西谷遺跡出土の煮炊具観察一覧

資料NO.	遺跡名	地区	小区	遺構	器種分類	口縁小分類	体部傾き	口縁貼付	遺存部分	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土
1	鏡千人塚遺跡			SS03	鍋F	Ⅳ	2		口縁部～底部	29.6	16.0	(12.0)	中砂粒を多く含む。
2	鏡千人塚遺跡			SS03	釜B	－	－		口縁部～肩部	17.0			中砂粒を多く含む。
3	鏡千人塚遺跡			SS03	釜B	－	－		口縁部	15.2			中砂粒を少量含む。
4	鏡千人塚遺跡			SS03石組み	釜	－	－	a	胴部～底部	外径29.0	18.0		細砂粒を少量含む。
5	鏡千人塚遺跡			第２トレ・SX01	鍋B	－	1		口縁部～胴部	30.0			中砂粒を多く含む。
6	鏡千人塚遺跡	1区		SD27	鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部	25.0			細砂粒を多く含む。
7	鏡千人塚遺跡	1区		SB28	鍋D	－	1		口縁部～底部	28.0	18.0	(12.0)	細砂粒を少量含む。
8	鏡千人塚遺跡	1区		斜面表土	鍋F	Ⅲ	2		口縁部				細砂粒を少量含む。
9	鏡千人塚遺跡	5～8区		ST01	鍋F	Ⅰ	1		口縁部	16.4			中砂粒を多く含む。
10	鏡千人塚遺跡	6区		SK07	釜B	－	－		口縁部～胴部	14.0			細砂粒を少量含む。
11	鏡千人塚遺跡		土器群A		鍋F	Ⅱ	2	b	口縁部～胴部	31.5			中砂粒を多く含む。
12	鏡千人塚遺跡	7区			鍋B		2		口縁部～底部	26.0	15.5	9.5	中砂粒を少量含む。
13	鏡千人塚遺跡	9区	イ-4		鍋F	Ⅱ	2	b	口縁部～胴部	30.5			細砂粒を少量含む。
14	鏡千人塚遺跡			SK17	鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部	33.0			中砂粒を多く含む。
15	鏡千人塚遺跡	10区		表土	鍋F	Ⅲ	2	a/b	口縁部	34.5			中砂粒を多く含む。
16	鏡千人塚遺跡			SK17 周辺	鍋D	－	1		口縁部				中砂粒を多く含む。
17	鏡千人塚遺跡	10区		S03	鍋F	Ⅱ	2	c	口縁部～胴部				細砂粒を多く含む。
18	鏡千人塚遺跡	12区			鍋F	Ⅴ	1	b	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
19	鏡千人塚遺跡			S35	鍋F	Ⅴ	1	c	口縁部				中砂粒を多く含む。
20	鏡千人塚遺跡	12区			鍋F	Ⅴ	2		口縁部～胴部	36.5		(12.5)	粗砂粒を多く含む。
21	鏡千人塚遺跡	8区		表土	釜			a	鍔部				細砂粒を少量含む。
22	鏡千人塚遺跡	10区			釜				鐶付				粗砂粒を少量含む。
23	鏡西谷遺跡	A	B7②		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部	27.2			粗砂粒を多く含む。
24	鏡西谷遺跡	A	B7①		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
25	鏡西谷遺跡	A	C5②トレ	溝下層？	鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
26	鏡西谷遺跡	A	E7	崩壊土	鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部				粗砂粒を多く含む。
27	鏡西谷遺跡	A	E7	崩壊土	鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
28	鏡西谷遺跡	B	G3	SK02	鍋F	Ⅲ	2	d	口縁部				粗砂粒を少量含む。
29	鏡西谷遺跡	B	G3	SK02	鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
30	鏡西谷遺跡	B	G3	SK02	鍋F	Ⅳ	2	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
31	鏡西谷遺跡	B	F2	褐色土	鍋F	Ⅴ	1	a	口縁部				細砂粒を多く含む。
32	鏡西谷遺跡	B	H2,F4		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
33	鏡西谷遺跡	B	F6		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
34	鏡西谷遺跡	B	F4		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				白色中砂粒を多く含む。
35	鏡西谷遺跡	B	G4		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部～胴部				細砂粒を多く含む。
36	鏡西谷遺跡	B	F6.G5･6		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部				細砂粒を多く含む。
37	鏡西谷遺跡	B	F5･6		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部～胴部				細砂粒を多く含む。

焼成	色調				調整		残存量	備考
	外面		内面		外面	内面		
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目、櫛目	1/3	外面口唇部外縁まで煤付着。すり鉢を鍋に転用か。
良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	ナデ	ナデ、指頭圧痕、ハケ目	破片	No.4と同一個体か。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2	縦ハケ目	横ハケ目	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/4	灰白	10YR8/2	ナデ、指頭圧痕、ハケ目	横ハケ目	1/4	鍔の下まで煤付着。No.2と同一個体か。
やや不良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ナデ、ハケ目	1/4	表面摩滅あり。特に底部内部のあばた状の磨滅顕著。胴部まで煤付着。くびれから口縁端部まで（やや内湾）が長い
やや不良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	横ハケ目、ナデ	破片	
良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	縦ハケ目	横ハケ目	3/4	外面全体的に煤付着。
堅緻	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	縦・横ハケ目、ナデ	横ハケ目	破片	金雲母含む。口縁部からくびれの一部に煤付着あり
良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕、ハケ目（底部顕著）	横ハケ目（底部不定方向）	1/3	口縁から胴部煤付着（底部は無し）。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	
やや不良	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	縦ハケ目、ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	1/5	外面胴部から口縁部端まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	外面煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ナデ	破片	
良	灰白	10YR8/2	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
堅緻	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	破片	外面口縁まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	ナデ	ナデ、ハケ目	破片	
良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	縦ハケ目、ナデ	横ハケ目	破片	くびれ部から胴部煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	
良	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目、指頭圧痕	破片	
良	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	ナデか	ナデか	破片	摩滅。
良	橙	2.5YR6/8 ～ 7.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	破片	
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、ハケ目か	横ハケ目	破片	外面外縁まで煤厚く付着。
良	灰白	10YR8/2	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	外面外縁下まで煤付着。口縁部にも一部煤付着あり。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ナデか	破片	外面外縁したまで煤付着。口縁部にも一部煤付着。摩滅。
良	浅黄橙	10YR8/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目	破片	
やや不良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/4	黄白色	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで一部煤付着
良	にぶい黄橙～橙	10YR7/4 ～ 7.5YR7/6	浅黄橙	10YR8/4	ナデ、ハケ目	ナデ	破片	摩滅。
堅緻	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ナデ	破片	外面外縁（鍔下）まで煤付着。
良	にぶい黄橙～橙	10YR7/4 ～ 7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	摩滅。
良	橙	5YR6/6	赤褐	5YR4/6	ナデ	ハケ目か	破片	鍔下まで煤付着。摩滅。
良	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	ナデ、ハケ目	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。口唇端部に沈線１条。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	鍔下までと外面口縁にも一部煤付着。内面摩滅。
良	にぶい橙	7.5YR6/4	橙	7.5YR7/6	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	突帯（鍔）下まで煤付着。

第２表　鏡千人塚遺跡および鏡西谷遺跡出土の煮炊具観察一覧

資料NO.	遺跡名	地区	小区	遺構	器種分類	口縁小分類	体部傾き	口縁貼付	遺存部分	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土
38	鏡西谷遺跡	B	F6		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
39	鏡西谷遺跡	B	J6		鍋F	Ⅱ	2	c	口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
40	鏡西谷遺跡	B	G6		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
41	鏡西谷遺跡	B	J6		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
42	鏡西谷遺跡	B		SD01	釜B				口縁部～胴部	15.1		(16.0)	細砂粒を少量含む。
43	鏡西谷遺跡	B	H3,H4,I4		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部	31.2			中砂粒を少量含む。
44	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
45	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部	30.8			粗砂粒を少量含む。
46	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部	23.8			細砂粒を多く含む。
47	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部	20.2			細砂粒を少量含む。
48	鏡西谷遺跡	B	H6		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部	37.2			白色細砂粒を含む。
49	鏡西谷遺跡	B	I5～7・J6・7		鍋G		1		口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
50	鏡西谷遺跡	B	H4		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
51	鏡西谷遺跡	B	H4		鍋F	Ⅲ	2	a/b	口縁部				粗砂粒を少量含む。
52	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅲ	2	c	口縁部				中砂粒を少量含む。
53	鏡西谷遺跡	B	I4		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
54	鏡西谷遺跡	B	H5		鍋F	Ⅴ	1	a	口縁部				細砂粒を少量含む。
55	鏡西谷遺跡	B	H6		鍋F	Ⅱ		a	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
56	鏡西谷遺跡	B	I6		鍋F	Ⅱ		a	口縁部				白色細砂粒を多く含む。
57	鏡西谷遺跡	B	J5		鍋F	Ⅱ		c	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
58	鏡西谷遺跡	B	西半		鍋F	Ⅱ		a	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
59	鏡西谷遺跡	B	J5		鍋F	Ⅱ		a	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
60	鏡西谷遺跡	B	J5		鍋F	Ⅳ		c	口縁部～胴部				粗砂粒を多く含む。
61	鏡西谷遺跡	B	西半		鍋D		1		内耳部				細砂粒を多く含む。
62	鏡西谷遺跡	B			鍋F	Ⅴ	2	d	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
63	鏡西谷遺跡	B	C・D2		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部～胴部	22.0			粗砂粒を多く含む。
64	鏡西谷遺跡	B	BC1・2		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部	25.6			中砂粒を多く含む。
65	鏡西谷遺跡	B	C4,B4,ベルトB3・4		鍋F	Ⅲ	2	c	口縁部～胴部	32.2			細砂粒を少量含む。
66	鏡西谷遺跡	B	E5トレ.ベルトB3・4		鍋F	Ⅲ	2	c	口縁部～胴部	23.4			細砂粒を少量含む。
67	鏡西谷遺跡	B	C4・西半		鍋F	Ⅴ	2	a	口縁部～胴部	31.2			細砂粒を少量含む。
68	鏡西谷遺跡	B	D6		鍋F	Ⅳ	2	a	口縁部～胴部				粗砂粒を多く含む。
69	鏡西谷遺跡	B	D6		鍋F	Ⅴ	2	d	口縁部～底部	37.8	(22.0)	16.5	中砂粒を少量含む。
70	鏡西谷遺跡	B	BC1・2		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				細砂粒を多く含む。
71	鏡西谷遺跡	B	BC1・2		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
72	鏡西谷遺跡	B	C4		鍋G		1		口縁部～胴部	18.0			中砂粒を少量含む。
73	鏡西谷遺跡	B	C2		鍋G		1		口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
74	鏡西谷遺跡	B	CD2		鍋F	Ⅲ	2		口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
75	鏡西谷遺跡	B	D4		鍋F	Ⅲ	1		口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
76	鏡西谷遺跡	B	D4		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。

焼成	色調				調整		残存量	備考
	外面		内面		外面	内面		
良	にぶい赤褐	5YR5/3	橙	5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	煤付着か。No.35・63と類似。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	No.57と類似。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。内面摩滅。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	ハケ目、ナデ	横ハケ目	1/4	煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙～灰黄褐	10YR7/3 ～7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	1/5	外面口縁（鍔下）まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙～灰黄褐	10YR7/3 ～5/2	ナデ、縦ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目	破片	外面外縁（鍔下）下まで煤付着。
良	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目	破片	外面口縁（鍔下）まで煤付着。
良	浅黄～にぶい橙	2.5Y8/2 ～7.5YR7/2	にぶい黄橙～にぶい橙	10YR7/4 ～7.5YR7/4	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ハケ目	破片	
良	灰白～灰黄	2.5Y8/2 ～7/2	灰白	2.5Y8/2	ハケ目か、ナデ	ハケ目	破片	外面摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。内面摩滅。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	口縁外側まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	ハケ目、ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	摩滅。
良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	ナデ	ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	横ハケ目	破片	
良	灰白	10YR8/2	淡黄	2.5Y8/3	ナデ、ヘラか	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	橙	7.5YR6/6	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ナデ	破片	金雲母含む。
良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	ハケ目、指頭圧痕	破片	NO.39と類似
良	橙	7.5YR7/6	明黄褐	7.5YR7/6	ナデ、横ハケ目、縦ハケ目	ハケ目、ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	外面外縁下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	破片	鍔下まで煤付着。金雲母含む。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
堅緻	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR6/2	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、指頭圧痕、ナデ	破片	鍔下まで煤付着。金雲母含む。
良	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	摩滅。
やや不良	灰黄褐	10YR4/2	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	不明	破片	鍔下まで煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	鍔下まで煤多量付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2 ～7/3	ナデ、ハケ目か	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下（ほぼ口縁外縁）まで煤付着。
良	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙～灰黄褐	10YR7/4 ～6/2	ナデ、指頭圧痕、ハケ目	横ハケ目	1/3	煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい橙～褐灰	7.5YR6/4 ～4/1	ナデ、指頭圧痕	ナデか	破片	摩滅。鍔の張付け方法がNo.63と類似。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ	ナデか	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ハケ目、ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	外面わずかに部分的に煤付着摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	破片	口縁まで部分的に煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	縦ハケ目、指頭圧痕	ナデ	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。摩滅。
良	橙	5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデ	横方向ハケ目	破片	

第２表　鏡千人塚遺跡および鏡西谷遺跡出土の煮炊具観察一覧

資料NO.	遺跡名	地区	小区	遺構	器種分類	口縁小分類	体部傾き	口縁貼付	遺存部分	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土
77	鏡西谷遺跡	B	D4		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
78	鏡西谷遺跡	B	D5		鍋F	Ⅲ	2		口縁部				細砂粒を少量含む。
79	鏡西谷遺跡	B	E4		鍋F	Ⅴ	1		口縁部				中砂粒を少量含む。
80	鏡西谷遺跡	B	E4		鍋D		1		口縁部（内耳部）				中砂粒を少量含む。
81	鏡西谷遺跡	B	E4		鍋F	Ⅳ	2	b	口縁部～胴部				粗砂粒を多く含む。
82	鏡西谷遺跡	B	E5 トレ		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部				粗砂粒を少量含む。
83	鏡西谷遺跡	B	E5・6		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部				細砂粒を多く含む。
84	鏡西谷遺跡	C	G2	SK01（SB01内）	鍋F	Ⅰ	3	a	底部欠損	20.0		(10.6)	中砂粒を多く含む。
85	鏡西谷遺跡	C	G2.H2	SB01	鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部	30.0	20.0		粗砂粒を多く含む。
86	鏡西谷遺跡	C	GH2	SB01	鍋B		1		口縁部～胴部	31.4			細砂粒を少量含む。
87	鏡西谷遺跡	C	G2.H2	SB01	鍋B		1		口縁部～胴部	約30.0			粗砂粒を多く含む。
88	鏡西谷遺跡	C	G3,H3・4,I3・4	SB01	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部～胴部	23.2			中砂粒を多く含む。
89	鏡西谷遺跡	C	GH2・3	SB01	足鍋				脚部				白色粗砂粒を多く含む。
90	鏡西谷遺跡	C	G2	SB01	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
91	鏡西谷遺跡	C	G3	SB01	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
92	鏡西谷遺跡	C	G2	SB01	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				細砂粒を多く含む。
93	鏡西谷遺跡	C	G3	褐色土	鍋F	Ⅰ	2	a	口縁部				粗砂粒を多く含む。
94	鏡西谷遺跡	C	G3		鍋F	Ⅱ	2	c	口縁部				中砂粒を多く含む。
95	鏡西谷遺跡	C	G3		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
96	鏡西谷遺跡	C	G2.H2	SB01	鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				白色中砂粒を多く含む。
97	鏡西谷遺跡	C	F1・2.G1・2	撹乱土	鍋F	Ⅱ	2	c	口縁部				細砂粒を少量含む。
98	鏡西谷遺跡	C	H3	褐色土	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
99	鏡西谷遺跡	C	H3・4.I3・4		鍋D				口縁部（内耳部）				細砂粒を少量含む。
100	鏡西谷遺跡	C	H3・4.I3・4	撹乱土	鍋F	Ⅱ	2	b	口縁部				白色中砂粒を多く含む。
101	鏡西谷遺跡	C	G5 2 トレ		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				粗砂粒を少量含む。
102	鏡西谷遺跡	C	H3・4.I3・4	撹乱土	鍋F	Ⅲ	2		口縁部				白色中砂粒を少量含む。
103	鏡西谷遺跡	C	H3・4.I3・4	撹乱土	鍋F	Ⅴ	1	a	口縁部				粗砂粒を少量含む。
104	鏡西谷遺跡	C	H2	SB01	鍋B		1		口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
105	鏡西谷遺跡	C	F2	SD01（SB01内）	鍋B		1		口縁部～胴部	33.0			細砂粒を多く含む。
106	鏡西谷遺跡	C	HI5		釜B				口縁部	12.0			細砂粒を少量含む。
107	鏡西谷遺跡	C	H3・4.I3・4		釜				胴部	外径29.0			細砂粒を少量含む。
108	鏡西谷遺跡	C	I5	トレンチ	鍋F	Ⅲ	2		口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
109	鏡西谷遺跡	C	B3		釜B				口縁部	14.0			中砂粒を多く含む。
110	鏡西谷遺跡	C	排土		釜				鐶付				粗砂粒を少量含む。
111	鏡西谷遺跡	C	B1・2		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				粗砂粒を多く含む。
112	鏡西谷遺跡	C	B1・2		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				粗砂粒を少量含む。
113	鏡西谷遺跡	C	B1・2		鍋F	Ⅳ	2	c	口縁部				細砂粒を少量含む。
114	鏡西谷遺跡	C	B1・2		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部				白色細砂粒を多く含む。
115	鏡西谷遺跡	C	B3		鍋F	Ⅳ	2	c	口縁部				細砂粒を多く含む。
116	鏡西谷遺跡	C	B4		鍋F	Ⅲ	2	c	口縁部				細砂粒を少量含む。
117	鏡西谷遺跡	C	C4		鍋F	Ⅲ	2		口縁部～胴部				細砂粒を多く含む。

焼成	色調				調整		残存量	備考
	外面		内面		外面	内面		
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	指頭圧痕、一部ハケ目	横ハケ目	破片	煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/3	指頭圧痕、沈線	ナデ	破片	口縁外側まで煤付着。摩滅。
やや不良	灰白	10YR8/2	浅黄橙	10YR8/3	指頭圧痕	不明	破片	一部煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/4	ナデ、ハケ目か	ハケ目	破片	鍔やや下まで煤付着。摩滅。
良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	ナデ	横ハケ目、ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2	ナデ、指頭圧痕、ハケ目？	横ハケ目、ナデ	1/5	外面鍔上まで煤付着。内面黒色
良	淡赤橙	2.5YR7/4	淡赤橙	2.5YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ナデ	1/4	煤付着。摩滅。底部破片あり。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目、ナデ	1/4	外面口縁部まで煤付着。
やや不良	灰黄褐	10YR6/2	灰白	10YR8/2	横ハケ目	横ハケ目	破片	煤わずかに付着。摩滅顕著。歪み大。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	縦・横ハケ目、ナデ	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい橙	5YR6/4			指頭圧痕		破片	底部から脚部半分まで煤付着。No.90の胎土と類似。
良	にぶい赤褐	5YR5/3	橙	5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	口唇部外・内側口縁近く煤付着。
良	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR5/1	ナデ	ナデ	破片	煤付着。
良	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	外面口縁に一部煤付着。
良	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	
良	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい橙	7.5YR6/6	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	破片	鍔下まで煤厚く付着。
良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ナデか	破片	鍔下まで煤厚く付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/4	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
堅緻	灰褐	7.5YR5/2	明赤褐	5YR5/6	ナデ	横ハケ目、ナデ	破片	鍔下まで、一部外面口縁も煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目、ナデ	破片	鍔下（外面外縁）まで煤厚く付着。穿孔1。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、指頭圧痕	破片	摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデか	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	不明	ナデ	破片	外面口縁まで煤厚く付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、縦ハケ目、指頭圧痕	ハケ目	破片	
良	灰褐	7.5YR5/2	にぶい橙	7.5YR7/4	縦ハケ目、ナデ	横ハケ目	破片	煤付着。
堅緻	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	内外面煤付着。
堅緻	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ	破片	鍔下・外面まで煤付着。
良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	ハケ目、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	破片	外面外縁下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	ナデ	ナデ	破片	摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ハケ目、指頭圧痕	破片	
やや不良	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	ナデ	ナデか	破片	
良	灰黄	2.5Y6/2	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	破片	煤付着。
良	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	ナデ	ハケ目	破片	鍔下まで煤厚く付着。摩滅。
良	浅黄橙	10YR8/4	灰白	10YR7/1	ナデ、ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデか、指頭圧痕	ナデ	破片	口縁部に沈線一条。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	破片	
良	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	縦ハケ目、ナデ	横ハケ目	破片	外面外縁下まで煤付着。

第２表　鏡千人塚遺跡および鏡西谷遺跡出土の煮炊具観察一覧

資料NO.	遺跡名	地区	小区	遺構	器種分類	口縁小分類	体部傾き	口縁貼付	遺存部分	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土
118	鏡西谷遺跡	C	D1・2		鍋F	Ⅲ	2	a	口縁部～胴部				粗砂粒を多く含む。
119	鏡西谷遺跡	C	D3		鍋F	Ⅱ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
120	鏡西谷遺跡	C	D3		釜B				口縁部				中砂粒を多く含む。
121	鏡西谷遺跡	C	D5	暗褐色土	鍋F	Ⅰ	2	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
122	鏡西谷遺跡	C	排土		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
123	鏡西谷遺跡	C	排土		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				細砂粒を少量含む。
124	鏡西谷遺跡	C	排土		鍋F	Ⅴ	2	c	口縁部				細砂粒を少量含む。
125	鏡西谷遺跡	D	C6,D2	包含層	鍋F	Ⅲ	2		口縁部～胴部	35.0		(14.0)	中砂粒を多く含む。
126	鏡西谷遺跡	D	D5・6,E5・6	表土	鍋F	Ⅲ	2	d	口縁部～胴部	33.0			細砂粒を多く含む。
127	鏡西谷遺跡	D	D5・6,E5・6		釜B				口縁部				細砂粒を多く含む。
128	鏡西谷遺跡	D	D5・6,E5・6		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部				粗砂粒を少量含む。
129	鏡西谷遺跡	D	E10	表土	鍋F	Ⅴ	1		口縁部				中砂粒を少量含む。
130	鏡西谷遺跡	E	B1・2	第１層	鍋G		1		口縁部				細砂粒を少量含む。
131	鏡西谷遺跡	E	B5		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
132	鏡西谷遺跡	E	C1・2		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				粗砂粒を少量含む。
133	鏡西谷遺跡	E	CD1・2		鍋F	Ⅰ	2	a	口縁部				細砂粒を少量含む。
134	鏡西谷遺跡	E	D2	第１層	鍋F	Ⅲ	2	c	口縁部				細砂粒を少量含む。
135	鏡西谷遺跡	E	D4		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				粗砂粒を多く含む。
136	鏡西谷遺跡	E	E2		鍋D		1		口縁部				細砂粒を少量含む。
137	鏡西谷遺跡	E	EF4		鍋か		2	b	口縁部～胴部				中砂粒を少量含む。
138	鏡西谷遺跡	E	E5	第２層	鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
139	鏡西谷遺跡	E		No.２ トレ 南半	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
140	鏡西谷遺跡	E		溝排土	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
141	鏡西谷遺跡	E	E3	第２層	釜			a	胴部				細砂粒を少量含む。
142	鏡西谷遺跡	E	E5	第２層黒色土	釜			a	胴部	外径23.0			中砂粒を多く含む。
143	鏡西谷遺跡	E	東排土	第２層黒色土	鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				中砂粒を多く含む。
144	鏡西谷遺跡	E	東排土		鍋F	Ⅱ	2	a	口縁部～胴部				細砂粒を少量含む。
145	鏡西谷遺跡	F	D4・6	SA01	鍋F	Ⅳ	2		口縁部～底部	37.5	21.0	(12.6)	中砂粒を少量含む。
146	鏡西谷遺跡	F		SD01	鍋F	Ⅳ	1	c	口縁部～胴部	31.0			中砂粒を多く含む。
147	鏡西谷遺跡	F	C3・4	セクションベルト	鍋F	Ⅲ	2	d	口縁部	31.2			中砂粒を多く含む。
148	鏡西谷遺跡	F	G19		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部	31.6			中砂粒を多く含む。
149	鏡西谷遺跡	F	D10・11		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部				粗砂粒を多く含む。
150	鏡西谷遺跡	F	G19		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部～胴部				中砂粒を多く含む。
151	鏡西谷遺跡	F	G19		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				細砂粒を少量含む。
152	鏡西谷遺跡	G	B4・排土		鍋F	Ⅲ	2	d	口縁部～胴部	32.6			細砂粒を少量含む。
153	鏡西谷遺跡	G	A2	地山カット下底	鍋F	Ⅲ	2	d	口縁部				細砂粒を少量含む。
154	鏡西谷遺跡	G	D2	11・12トレ	鍋F	Ⅴ	1	a	口縁部				中砂粒を少量含む。
155	鏡西谷遺跡	G	B5		鍋F	Ⅳ	2	b	口縁部				中砂粒を多く含む。
156	鏡西谷遺跡	H	JK-8区		鍋F	Ⅲ	2	b	口縁部				中砂粒を多く含む。
157	鏡西谷遺跡	H	JK-8区		鍋F	Ⅰ	1	a	口縁部				粗砂粒を多く含む。

＊資料NOは、実測図のNOと一致する　　＊釜はいずれも「羽釜型鍋」　　＊器高：(　　)は残存値

焼成	色調				調整		残存量	備考
	外面		内面		外面	内面		
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	ナデ	破片	外面外縁下まで煤厚く付着。
良	橙	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/6	ナデ	ハケ目、ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ナデ	破片	金雲母含む。
良	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	7.5YR8/4	ナデ、横ハケ目	横ハケ目か	破片	鍔下まで煤付着。
良	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	ナデ	ナデ	破片	摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	ナデ	破片	摩滅。
良	灰褐	7.5YR5/2	浅黄橙	10YR8/3	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4	縦ハケ目、ナデ、指頭圧痕	ハケ目	1/4	外面外縁下まで煤付着。摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	灰黄	2.5Y6/2	ハケ目、ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	ナデ	破片	煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	煤付着。摩滅。
良	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデか	ハケ目か	破片	鍔下まで部分的に煤付着。摩滅。
良	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、指頭圧痕	破片	外面口縁まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデか	ナデ	破片	摩滅。外面鍔下まで煤付着。
良	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
良	橙	5YR6/8	橙	5YR6/8	ナデ	ナデ	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下までわずかに煤付着。
良	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	7.5YR8/4	ナデか	ナデか	破片	摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	破片	内耳に穿孔1。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ハケ目	破片	外面口縁まで煤付着。
良	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	ナデ	ナデ	破片	摩滅。外面鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ	ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	橙	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	ナデ	ナデ	破片	鍔下まで煤付着。
不良	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	ナデ	ナデ	破片	煤付着。摩滅。
良	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	ナデ、ハケ目か	ナデ、指頭圧痕	破片	鍔下まで煤厚く付着。
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデか	ナデか	破片	摩滅。他破片E1・2・3・4
良	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR6/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	縦・斜ハケ目、指頭圧痕	横ハケ目、ナデ	2/3	外面外縁下まで煤付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	1/5	底部煤付着。鍔下までも若干煤付着あり。
良	浅黄	2.5Y7/4	浅黄	2.5Y7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	金雲母含む。
良	明黄褐	10YR7/6	明黄褐	10YR7/6	ナデ	ナデか	破片	鍔下まで煤付着。摩滅。
良	浅黄	2.5Y7/4	浅黄	2.5Y7/4	ナデ、指頭圧痕	ハケ目	破片	No.146と類似。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、縦ハケ目	横ハケ目	破片	底部あり、接合しないが煤付着。摩滅。
堅緻	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、ヘラか	ハケ目	破片	摩滅。
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、縦ハケ目、指頭圧痕	ハケ目、ナデ	1/5	鍔下まで煤厚く付着。
良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	ナデ、指頭圧痕	横ハケ目	破片	鍔下まで煤付着。
堅緻	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	ナデ、縦ハケ目	横ハケ目	破片	
良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ、ハケ目	ハケ目か	破片	摩滅。No.146と類似。
やや不良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	ナデ	横ハケ目	破片	金雲母含む。摩滅。
堅緻	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	ナデ	ナデ	破片	

＊調整：横ハケ目＝横方向にハケ目が施されたものを指す

Medieval and Premodern Haji ware cooking jar and pot excavated from the Kagami-Senninzuka and Kagami-Nishitani Sites in the Higashi-Hiroshima Campus

Eriko Ishimaru, Miho Ochika

The southern foot of the Kagamiyama Castle Site is an important area for understanding the culture of the Saijo Basin in the Middle Ages. We report a medieval and premodern Haji ware cooking pot and jar that were excavated from the Kagami-Senninzuka and Kagami-Nishitani Sites of the Higashi-Hiroshima campus. We confirmed the presence of numerous jars with triangular or u-shaped brims under the mouth edge (Haji ware cooking jar F). Jars in which the brim opens into a socket have also been confirmed (Haji ware cooking jars B and C). Some pot bodies with brims (Haji ware cooking pots A and B), inner ear (Haji cooking jar D), leg of hoot jar and pot hanger have been confirmed as well. The wing-shaped pots of the Aki and Bingo areas are classified into Class 2 (F-A, F-B), and the Kagami Area mainly consists of F-B type pots with a rich distribution in the Saijo Basin. Changes such as the things which there is body outwardly are accepted by a thing having a long brim, and it is thought that I have width at the use time of remains. The discovery of numerous Middle Ages cooking utensils in the Saijo Basin provided useful information with regard to medieval production and distribution. In the future, we would like to investigate the remains of other relics located in the surrounding area.